

# 略本系「俊頼髓脳」の研究(二)

— 関西大学図書館蔵「俊秘抄」翻刻 —

## 俊頼髓脳研究会

### △解説▽

本研究に取り上げた略本系「俊頼髓脳」は、赤瀬知子氏「俊頼髓脳」における享受と諸本―諸本論のための試論―（『国語国文』一九八二年八月）が略本Ⅱ類と分類した諸本を謂う。赤瀬氏は三十二本を挙げる。うち「唯独自見抄」の書名を持つ三本（書陵部本、松平文庫本、彰考館文庫本）は、別類にするのが適當である（俊頼髓脳研究会編『唯独自見抄』一九九七年二月刊に述べた）。略本Ⅱ類の本文は、広本と比べる時、久曾神昇氏や赤瀬知子氏などがすでに指摘している通り、また両氏の指摘するほかにも異名一覽の後に続く箇所やかやり火の注文に目立った異文が認められるなど対立する本文がある。いま詳細に論及する余裕はないが、これらの異文の存在は「俊頼髓脳」の読解において注意すべきであろう。本研究で翻刻した関西大学図書館蔵「俊秘抄」は、すでに（一）で触れたように坤巻末尾に明暦二年校合の奥書が見え（それ以前の本文を伝えるとすると当該伝本中最も古い書写年代になる）、さらに天保九年の岩崎美隆による丁寧な朱書イ本校合もあつて、略本Ⅱ類の伝本中で、その基準となるべき良好な本文をもつと思われる。いま「俊秘抄 下」を翻刻するにあたり、以下に若干の事柄について解説する。

関大本の傍書における朱墨の区別および頭注

上巻と下巻を便宜分けて(両巻の違いでもある)、それぞれ該当する傍書を頁・行で示す。

上巻の場合 「くイ」とあるものはほとんどが朱で、「イ」と記さない傍書、漢字に付された訓みや「く歎」「本ノマ、」とあるなどは、墨である(ただし、「イ」のない朱傍書は、ら 61・11、いへ 73・1、と歎 89・14、は 91・14、か 104・13、と 105・2、塩 110・2、ふ 113・13。なお99・13の本文中「よき哥に」の「に」は朱書き、底本では行末にあるため本文中に挿入されている)。「くイ」の形で墨であるものは次の通り。他本にもみえる場合で、カタカナ書きが目立ち、多くは美隆の校合とは区別すべきものと考えられる。

河内イ 63・5、カイ かし だてイ 64・10、御返事ならてイ本 65・3、まいれイ 65・6、ヲキイ 70・1、コノイ 70・7、なりイ 73・2、にイ 73・4、歳イ 73・8、ものイ 74・2、そ 76・10、ハカナクテイ 79・4、ハイ 81・12、ホリエイ 84・3、よもイ 88・12、春さくイ 94・11、ソイルイ 94・12、くもれイ 95・4、身イ 95・11、とめイ 96・1、クルイ 96・5、きイ 96・11、にしイ 96・14、カツイ ツライ とイ 97・1、イマコンイ本ニ 101・11、ふるイ 101・12、のこイ 108・5、タイ 110・12、イイ 110・13、タイ III・2、ヒルハフカテヨルフクカセナリイ ヲンナノヨムヘシイ 114・1、カホカニカセノヨマサルヲハイ本 114・3、家によひあつめてイ 114・7、きみイ 116・13、マロイ 116・14、ユキイ本 126・5

下巻の場合 上巻に比べ墨傍書は少なく、引用歌の頭に記された合点(33・4、34・1、35・1、35・8、37・4、38・2)や「本ノマ、」以外では、墨傍書は次の通り。なお、67頁8行の「などは朱。

趙葛 35・2、胡城 35・8、カイリツ 35・9、ケン 36・3、ヘンクハ 37・4、セウカウふりて 37・11、遍照寺 43・8、キ 43・11、餓鬼 66・12、いか 95・14

また、上巻の初めあたりには頭部分の余白に岩崎美隆によると思われる次のような注が書き込まれている。適当な位置を翻刻本文の頁・行によつて示す。参考に朱墨の別、底本の丁数をあわせて記す。

此一件此抄の序文なり 61・4 墨、一丁表

此書名或ハ俊頼髓脳トモイヘリ 61・4 朱、一丁表

手名植足名植稲田姫父母素盞鳴尊稲田姫をよはる給ふ時姫の哥日もくれぬさくさめのとじにて出よ心のヤミに我まとはすなサクサメ刀白は尊(ミコト)ノ媒せし人也 62・12 墨、三丁裏から四丁表

聖徳太子 墨、63・2 四丁表

あはせたきものすこしと云十文字を句の上下に置也 朱、65・1 六丁裏

万葉に短哥と云は普通三十一字の哥也こゝに短哥といへるは長哥也貫之万葉を見誤りて古今集に短哥としるせるを後人鑿説をくはへて何かと云也貫之の比は万葉の和点なかりし故むまくよみえざる歟後撰集の選者五人にあふせてはしめて和点をくはへしめられたりこれより万葉は人よくよむことを得たる歟古今集には万葉の哥を入さるよし序にかけれ共誤て数首入是万葉を見しらぬ故也 65・11 墨、七丁裏から八丁表

### 錯簡について

関大本も含め、同系統の諸本には「みかのよのもちみは……(四二九番歌)の注文中と巻末部分に錯簡がある。同系統の諸本の多くが、その原型をひとつにする証左となる。ただし、彰考館文庫蔵「俊秘抄」、東京大学総合図書館蔵「無名抄」(明和九年田代更生写)、京都大学文学部蔵「無名抄」は錯簡をもたない。この三本は、錯簡が生じる前の形を伝えていると考えられるが、錯簡のある諸本との関係は、ひとまず同系統と認められるものの異同もあり簡単に論じられない。なお、後者二本について、池田富蔵氏『源俊頼の研究』に紹介解説がある。

さて、錯簡部は、下巻翻刻本文中に次のような符号によつて便宜示した。翻刻本文93頁4行から9行までの【】内の一節は、103頁2行の\*印の位置にあるべきで、すなわち、「よの人もさまてはおもひ\*わかしとて」の「おもひ」は【】ひたらさめりされはなをしらぬことなめり……に続き（「ひ」が重複するのは錯簡後の処理の結果であろう）、「後冷泉院の御時四条の宮の御ゆめさ」の後に「わかしとて」が続く形に修訂されるべきである。

#### 「或本」校合について

錯簡の存在は、この系統の諸本の原型を限定できる特徴だと思われるが、さらに、次の①～⑫に挙げる（翻刻本文頁で示す、なお全て上巻にあるので頁数は前号分）ように「或本」校合を記している。（カタカナによる比較的長いイ本注記もあるが略す。なお伝本により記載のない場合や本文文化している場合などがある。関大本も⑤⑦を落としている。）

① 80、② 92、③ 94、④ 101、⑤ 102（7行目「よのすゑには」に傍書して「サラテモアリヌヘキコトナメリ或本」とある、関大本は欠く、いま内閣文庫本で補う）、⑥ 105、⑦ 106（1行目に傍書して「或本云タレトテカマウスサトハイツコソナト、ヒタラムカヘリコトソカクハスヘキトオホユレトアシカラム古今ニイラムヤハ云云」とある、関大本は「己下別也」「己上別也」と記すが傍書を欠く、いま内閣文庫本で補う）、⑧ 106、⑨ 108、⑩ 120、⑪ 124、⑫ 128

以上のうち、①⑤⑦⑧⑨は、近似した本文が「唯独自見抄」にだけみえる。②③④⑩は不明（②は略本I類の一本にみえるが）、⑪⑫は広本に近いというわけで、現存伝本中にすべて合致する一本は見当らない。しかし、「唯独自見抄」にのみ一致する本文があることは注意してよいだろう。なお、この「或本」校合は、前述の錯簡を持たない伝本にも見られる。いまのところ校合の時期は不明とせざるをえない。

なお、本系統の伝本の多くは、関大本同様、寿永二年八月二日の見合云々の奥書載せているが、国文学研究資料館蔵「俊秘抄」、酒田市立光丘図書館蔵本、神宮文庫蔵「俊頼髓脳」などは奥書を持たない。また、内閣文庫蔵二本

略本系「俊頼髓脳」の研究（二）

や書陵部蔵「俊秘抄」、彰考館文庫蔵本などは寿永二年見合の奥書のみで智範相伝の奥書を持たない。これら奥書の問題も含めて、残された課題は多い。

略本系「俊頼髓脳」の研究（二）の訂正

誤	御返事なくてイ本	65・3、	正	御返事ならてイ本
	ハイ	ルイ	94・12、	ソイ
	ルイ			ルイ
	れ歟イ	96・11、		れはイ

最後になりましたが、『俊秘抄』の翻刻を許可された関西大学図書館ならびに、いろいろお世話いただいた同図書館の関係各位に研究会一同心より深謝申し上げます。

◇俊頼髓脳研究会

菅田耕一・海野圭介・北山円正・小林 強・佐藤明浩・田中宗博・中原香苗・福島 尚・安井重雄  
鈴木徳男・山本和明

俊秘抄 下

ふる雪にみのしろ衣うちきつゝはるきにけりとおとろかれぬる

山ざとのくきはに露もしけからんみのしろ衣ぬはすともきよ

△これはとしゆきかむつきのついたちにきさいのみやにまいりたりけるに雪のふりければおほうちきをたまはりてよめる哥なりみのしろ衣とはゆきのふりかゝるにうへにかひくしくうちきたるなむみのしろ衣とおほゆるとよめるなりはるきにけりといふははるのはしめなれはことさらにとておほうちきをたまはりたるかめつらしさにはるきにけりとはよめるなり

つぎの哥ははしめの歌をためしにしてたひのみちにはつゆけからむみのしろにきよとてぬはすともとよめるなり

せなかためみのしろ衣うつときそ空行かりのねもまかひける

これもおなし心なり

つくはねのにぬくはまゆのきぬはあれと君のみけしにあやにきまおし

あらたまのてたまもゆらにをるはたを君かみけしにぬひイはてきむかも

△これ「は」ふたつは万葉集の哥なりつくはねといへるは木のおひたるところをいへるなりにくはまゆといへるはくはの木わかきなるはをはしめてこきくはせかいこのまゆ「か」してをりたるきぬといへるなりみけしといへるはおもひかけたる人の身にちかくふれたるきぬならねはとかしなしきみか身にふれたるきぬなんあやにてにきまほしといへるなり次の哥もおなし心なり

くれはとりあやにわひしくありしかはふたむら山はこえずなりにき

かへし

から衣たつをおしみし心うちふたむら山のせきと成ける

この哥はおほやけのつかひにてあつまのかたへまかりけるにあらためたる事ありてめしかへされてみやこへまうてきたりけるをめきよてよろこひなから人をこせてはへりければみちにてひとの心さしをこせてはへりけるくれはとりのあやをふたむらつゝみてをこすとてよめる哥なりくれはとりといへるはそのあやのなをいはむとてふたむら山とはよめる也

かをさしてむまといひける人もあれはかもをもをしとおもふなるへし

かへし

なしといへはをしむかもとおもふらんしかやむまとそいふへかりける

△この哥のことは、拾遺のかくし題のところにはのく申たりこの哥の心は秦のよににせいときこゆるみかとをはしけりそのみかとのちの王にもにすをろかにおはしけるときの大臣にてうかうといふ臣ありその大臣みかとのをろかにおはするけしきを見てくにをうははんの心あるなり御はおもひなから人の心もしらすおほつかなぎにたれかたにかよりたるところみむとてかのしをていわうの御前にゐてまいりてかゝる馬なんゆけると奏し申けりみかたあやしみてこれはしかなりまたくむまにあらすてうかうまうさくまさしく馬也あまたの人にとはしめ給へしみなまうさくまさしく馬也とまうす人くはわかたによるなりけりとて王位をうはひたてまつりけるとそいへる

秋風に初かりかねそきこゆるたかたまつさをかけてきつらむ

△この哥は漢の武帝とまうしけるみかとの御とき胡城にこせいといへるところに蘇武といへる人をつかはしたりけるかえかへらてとしころありけるを衛律カイリツといひける人の又ゆきて蘇武はありやととひければあるをかくしてその人はうせてとしひさしくなりぬといひければそら事をかくしていふそと心えて蘇武しなすこイなりこの秋かりのあしにふみをかきてたてまつれりそのふみをみかところむして蘇武いりイまにあ〇とはしろしめしたり「とはかりことをなしていひければはしかるにてはやくなしとおもひてまことにはありといひてあはせたりけるとて」これによそへてかのかりの哥はよめるなり

天の河うきゝにのれるわれなれやありしにもあらずよはなりにけり



これはむかし「の」うねへなりける物をみかたくひなくおほしけりいならぬ事ありてきさいとにいたりけるほとに  
 わすれさせたまひにけり心ちよろしくなりていつしかまいりたりけりむかしにもにすみえければうらめしとおもひて  
 まかりいてゝたてまつりける哥なり本文あり漢の武帝の時に張騫ケンといふ人をめしてあまのかはのみなかみたつねてま  
 いれとてつかはしければうきゝにのりてかはのみなかみにたつねゆきければみもしらぬところにゆきてみればつねに  
 みる人にはあらぬさるましたかるものはたあまたたてゝぬのをゝりけり又しらぬをきなのありてうしをひかへてたてりこ  
 れはあまのかはといふところなりこの人くはたなはたひこほしといへる人くなりさてわれはいかなる人とそとくと  
 ひければ張騫といへる人なり宣言ありてかはのみなかみたつねてきたるなりとこたふればこれこそは河のみなかみと  
 いひていまはかへりねといひければかへりにけりさてまいりたりければいかにそかはかみはたつねえたりやとゝはせ  
 たまひければたつねてはへりあまのかはのほとりにまかりたりつればたなはたひこほしなど牛をひかへてたなはたは  
 たをゝりてこれなむかはのみなもとゝ申つればそれよりかへりまいりたるとそ申けるところのさまのありしにもあら  
 すかはりたりければそのよしをきゝてかくよめるなり「この」この哥をみかところむしてあはれとやおほしめしけむ  
 もとのやうにかたときもたちさらすおほしめしけりそののちいくはくもへすしてうせたまひにけりつかのうちにおさ  
 めたてまつりけるをりにこのうねへいきなからこもりにけりそのつかはいけこめのみぎゝきとてやくしてらのにしに  
 いくはくものかてありまことにや張けんかへりまいらさりけるさきに天文とものまいりて七月の七日けふあまのかは

のほとりにしらぬほしいてきたりとそうしければあやしみおほしけるにこの事をきこしめしてこそまことにたつねゆきたりけりとおほしめしけれ

ちのなみたおちてそたぎつ白河は君か代までのなにこそありけれ

ちのなみたといふ事はをとりある事なりもろこしに下和といへるたまつくりのありけるかたまをつくりてみかとにたてまつりたりけるをみかことたまつくりをめして見せさせ給ければひかりもなく不用の物なりと申ければいかてかゝる不用のものをはたてまつりけるそとて左の手をきらせ給けりさて又よかはりてあたらしくたゝせたまへる宇王に又たまをたてまつりけるをはしめのやうにたまつくりをめしてとはせ給ければこれ又不用の玉也と申ければ又右の手をきられにけりなきかなしむ事かぎりなしなみたつきてちのなみたをなかつてよるひるなきけり又よのなかゝはりてあたらしきみかとおはしましたるになをこりすまにたまをつくりてたてまつりければみかとたまつくりをめしてやうあらむとてみかゝせさせ給ければえもいはすひかりをはなちてゝらさぬところなかりけり御てこ代といへるたひまてちのなみたをなかつてなきけるか三代といふたひ蒙賞そよるこひける宇王のをろかにおはしますためしに申事也みかとの御前にて荒涼してはよむましき事とそうけたまはりしかと承暦の哥合にもこひのうたに候めりしはいかなる事にか

初春のはつねのけふのたまはゝきてにとるからにゆらくたまのを

たまは、きかりこかまぎのむろのきとなつめかもと、かきはかむため

た<sup>△</sup>まは、きといへるは善と申きにねの目こまつをひきくしては、きにつくりてゐなかうとのいゑにむつぎのはつねのひかひこかに<sup>ふイ</sup>やはこやとそ申すなるそのやをねむまのとしむまれたるをんなのこかひするものよぎをかひめとつけてそれしてはきそめさせていはひのことはにいへる哥なりとそいひくた<sup>つイ</sup>へたるざれとつぎのうたにむろのきとなつめかもと、かきはかむためとよめるはた、<sup>クイ</sup>には、<sup>クイ</sup>は、きなとをいふにやあらむよろつもの<sup>たまとい</sup>に又いふことはをそへてよめはは、きなりともかれをほめむひはなとかたまといへることはそへさらむた、しは、き<sup>たイ</sup>のうくはむかし京こくの宮すところと申人は時平の大臣のむすめなり延喜帝王の女御にたてまつりたまはむとせられるに日ころよくくいとなみてすてにそのよになりてたしか<sup>クイ</sup>く<sup>クイ</sup>るまなとよせて女房などのるほとなりてにはかに寛平法皇御かうありて御くるまよせければかの大<sup>クイ</sup>臣おもひかけぬさましてぎはかれければたてにきたるなりとおほせられてをしていらせ給にけりをと、すへきやうもおほえたまはざりければた、あふきてをはしけるほとに内より藏人御使にてまいりてよいたくふけぬいかなることそとたつねさせ給ければと、よろこひながらこのよしを、つく、申されければしはし御返事もなくてとはかりありてしきりにをとしはふき申されける<sup>れイ</sup>はこれ<sup>れイ</sup>をいほ、したまはりぬとおほせられければいとあへなくあさましきことにてたしくるまにのりたる女房たちみなおりにけりいかによの人さたしけむとこそをしはかるるれ藏人かへりまいりてこのよしをそうしければものもおほせられざりけりみやすところのむかし「は」三

井寺のかたはらに志賀とてことのほかにけむしたまふところありけるにまいりたまひけるにかの寺ちかくなりてころのさまこのましくおほえ給ければ御車のみをひろらかにあけて水うみのかたなとみまはさせ給けるにいとちかくきしのうへにあさましけなるくさのいほりのありけるかことのほかにをいおとろへたるをいほうしのしろきまゆのしたよりめをみあはせ給へりければいとむつかしきものにもみえぬるかなとおほしてひきいらせ給にけりさてかへり給て又の日をいほうしのこしふたへにかゝまりたるかつゑにすかりてまいりて中門のほとりにたゝすみてきのふしかにて見参し給侍イし老法師こそまいりたれと申させ給へといひければしはしきゝいるゝ人もなかりけれとひねもすにゐくらしてあまりいひければかゝることなむ申ものゝはへると申ければしかさることあらむとおほせられてみなみおもてのひひきし〇くしのまにめしよせていかなること「ゝ」そとゝはせ給ければしはしはかりためらひてし賀にこの七十年はへりてひとへに後世菩提のこといとなみはへりつるにはからさるほかに見参をしていかにもたのおもひなくいまひとたひけさんをせんのはへりて念佛もせられすほとけにもむかはれさりつれはとしころのをこなひのいたつらになりなんことのかかなしきにもしたすけもやせさせおはしますとてつゑにすかりてなくゝまいりてはへるなりと申ければいとやすきことなりとのたまひてみすをすこしまぎあけてみえさせ給ければおもてのしはかすもしらすまゆのしろきさいゆきなとよりもまさりてをいかかまりはりて人ともおほえすまことにをそろしけなるさましてまもりいれてとはかりありてその御てをしはしたまはらむと申ければまうすにしたかひて御てをさしいたさせ給たりければわかひたいにあてゝ

よろつもおほえすなきてかのでにとるからにといへる哥をよみかけ申てすこしゐのくやうにてこのよにむまれ候てのち九十年にをよひはへりぬるにまたかはかりのよろこひはへらすこのつとめをもてもしおもひのまゝに弥陀の浄土にむまれなはかならすみちひきたてまつらむ浄土にむまれさせ給はゝみちひき給へと申てなきければ御返

よしさらはまことの道にしるへして我もいをきなへゆらくたまのを

とそおほせられけるこれをきゝてよろこひなからかへりにけりと能因法師帥大納言にかたり申けるにこの哥は萬葉集第廿卷にある本ありなき本ありこの本「はこ」の哥のみにあらずいもうたの五十余首なければきはめておほつかなきなりよくたつぬへしそのうたにゆらくたまのをとよめるゆらく○しとはイはらくといふことゝはなりたまのをとはいのちをいへることはなりされはこの御てをとりたるによりてしはしのいのちなんのひぬるとよむなりさせることなればともかやうのことゝもしろしめしたらむにあしかるましきことなればしるし申せるなり

かそ色は哀とみえむつはめすらふた「た」りのひとにちぎらぬものを

むかしおとこありけりむすめにおとこをあはせたりけるにおとこうせにければ又ことひとにむことらむとしけるをむすめのきゝてはゝにいひけるおとこにかつしてあるへきすくせあらましかはありつるをところそあらましかさるほうのなければこそしぬらめたとひし、イしたりとも身の宿世なれば又もこそしぬれさることおほしかくなといひければはゝ

きゝておほきにをとろきてちゝにかたりければちゝこれをきゝてわれしなむことちかきにありさらむのちにはいかにしてよにはあらむとてざる事はおもひよるそといひてなをあはせむとしければむすめおやに申けるやうはさらはこのいゑにすくひてこそみたるつはくらめをころしてめつはくらめにしるしもしてはなちたまへさらむに又のとしおとこつはくらめをくしてきたらむをりにそれを見ておほしたつへきといひければけにきもといひていゑにこうみたるつはくらめをとりておとこつはくらめをはころしてめつはくらめにはくひにあかきいとをつけてはなちつゝはくらめかへりてひとりくひのいとつきてまてきたりければそれをみておやとおとこあはせむの心もなくてやみにけりむかしのをむなの心はいまやうにはにさりけるにやつはくらめをとこふたりせずといへるふみの文なり

からすてふおほをそとりの心もてうつしひとゝはなになのるらむ

此哥伊勢國の郡司なりけるものゝ處にからすのすをくひてこをうみてあたゝめけるほどにおとこからすひとにうちころされにけりめからすこをあたゝめてまちぬたりけるにまことにひさしくみえさりければあたたためけるをすてゝことおとこからすまうけていまめつらしくうちくしてありきければかのかいこかへらててさりにけふ「子」それを見ていゑあるしの郡司道心おこして法師になりけりそれか心をよめるなりおほをそとりとはからすのなゝり

あさくらやきのまろとのにわかをればなのりをしつゝゆくはたかこそ

このうたはむかし天智天王太子にておはしましけるとき筑後國あさくらといふところにしひてすみ給けりそのやを

ことさらによろつものをまろにつくりておはしけるよりきのまろとのとはいひそめたりけるなりよにつゝませ給ことありてみやうにはえおはせてざるはかなるところにおはしけるなりさるつゝみ給事あるかゆへにいりかくる人にならずとはぬさきになのりをしていりた〇と起請をせられたりければかならずいっているひとのなりのをしけるとそいひつたへたるこのうたを本たいにしてきのまろとのなりのをしつゝよむなり大齋院と申ける齋院のとき藏人のふり女房にも申さむとてしのひてよるまいりたりけるにさるゝひともしつてあやしかりていかなる人そととひたつねければかくれそめてえたれともいはざりければみかとをさしてとゝめたりければかたらふ女房院にかゝる事こそはへれと申ければ哥よむものところそぎけとてゆるしてやれとおほせられければゆるされてまかりいつとてよめる哥

かみかきはぎのまろとのにあらねともなりのをせぬはひとゝかめけり

とよめりければ大齋院きこしめしてあはれからせたまひてこのきのまろとのといふことはしかくゝきゝしことなりとおほせられてとくゆるしやれ〇さふらひをめておほせられければいてにけり女はうにあひたりけるにこのことはさうとおほせられつるとかたりけるをきゝてこのことよみなからとしころおほつかなかりつることをきゝあきらめつるところこひけるとその齋院はむらかみの御むすめなればさためてしろしめしたらむとそのふのりも申けるそのふのりは「候し」もりふさかせむそなればきゝつたへてまうし

そのはらやふせやにおふるはゝききのありとてゆけはあはぬきみかな

この哥のこゝろたしかにかきたる物なしなのゝくにたるのにそイはらふせやといふところ「は」あるにそのところにあるもりをよそに見ればにはゝくはゝきにゝたるきのこすゑのみゆるかちかくよりてみればうせてみなときはきにしてみゆるといひつたへたるをこのころみたる人にとへははゝきゝと見えたるきもみえるイすざるきのみえはこそちかくよりてもかくれめとぞ申すむかしこそはさやうにもみえ候けめ

みちのくのしのふもちすり誰ゆへにみたれそめにしわれならなくに

これらはかはらの大臣なりしのふもちすりとつゝくへきにはあらすみちのくにゝしのふのこほりといふところに見たれたるすりをもちすりといふなりそれをこのみすりけるとそいひつたへたるそれをところのなとやかてそのすりのなとをつゝけてよめるなりへ遍照寺むそうしのみすのへりにそすられて候しは四五寸許きりとりて故帥こそちの大納言のせいわ院のみすのへりにまねはれて候しかはよの人みけうせし

せりつみしむかしの人もわかことや心にものはかなはさりけん

これは文書に秋芹キ芹と申こと候へとかなひ候はすたゝものかたりに申すはこゝのへのうちにゝはゝくものなと申すはとのもりつかきなどにやはをはきあるきけるにきさいの御かたにてよかイせのみすをにはかにふきあげたりけるにせりをめしけるにみてもの思になりて人しれすおもひあるぎていかていまいちとみたてまつらむとおもひけれとすへきやうもなかりければめしゝせりをおもひいてゝせりをつみて「みす」のかせにふきあげられたりしみすのあたりにをぎけ



りとしふれともさせるしもなかりければつるにやまひになりてうせなむとしけるほとにめにもしらせてしなんかいふせさにこのやまひはざるへきにてうけたるやまひにあらすしかくありしことによりて物おもひになりてうせぬるなり我をいとおしとおもはせりつみてとくにつくれといきのしたにいひてうせはてにけりそのちいひをきしことくにせりつみてほとけにまいらせやそらくはせなとそしけるそれかむすめのみやの女官になりてはへりけるかこのものかたりをし出るをきこしめしてあはれからせたまひてざる物にはみえしやうにおほゆれとのたまひてその女官をつねにめしよせてあはれにせさせ給ひけるそのきさきはさかのきさぎとそ申けるさもやおほしけんつねにみそかことをこのみてちむのといてたまひけると「かやつねにくたものとおほしくてなかひつにいりてそいてたまひけるもちたてまつりたりけるふさやこゝろひたりけん心をあはせてさかさまにたて「まづりたりければかほにちたまりてたへかたくおほしてなかひつあるきそれよりそとまりにけると人ものかたりにしけるとかやことしけししはたてよひのまにをけらむつゆはいてはらはむ

この哥はそくのきさきの哥イ同とてはしにしるし申たることにはうへわたらせたまひたりけるをりにとそあれとこのものかたりをうけたまはりてのちはさやうのみそか人はおほせられけるにやとそおほゆる

みつのえのうらしまかこのはこなれやはかなくあけてくやしがるらん

されはみつのえのうらしまのこといふ人ありけるなりみつのえのうらしまとは所のなよりおほきなるかめをつりい

てゝをきたりけるにうらしまのこかねたりけるにをむなになりてをりけるをみてめにしてありけるにめいさたまへわ  
かすむところへとさそひければつりしけるふねにのりて見もしらぬところにゆきてすみければまことにたのしくおも  
ふこともなかりけりしかはあれとふるき宮このこひしかりければわかありしところへかへしやりたまへあからさまに  
ゆきてかへりまいらむとあなかちにひひければしきおほさはかへりたまへとてかへしけるときにちいさきはこをゆ  
ひふむしてとらすとてこのほをかたみに見たまへあなかしこあけたまふなどかへすくいひかたらひてとらせつそ  
のほをとりにてふねにのりてかへりぬものところにかへりつきけるまゝにいつしかゆかしかりければみそかにとお  
もひてなわのいりたるそとてをつくほそめにあけて見ればけふりいてゝそらにのほりぬそのちをひかゝまりても  
のおほえすなりぬはやくこの人のよほぬをこめたるなりけりあけたることをくやくしくおもひてかへせとかひなしそ  
れにこゝろをえてよめるなり

我心なくさめかねつさらしなやはすて山にてる月を見て

この哥はしなのゝくにゝさらしなのこほりにをはずて山といふやまのあるなりむかしひとのめみをこにしてとしころ  
やしなひけるかはゝのをはとしをいてむつかしかりければこのはゝのをはをすかしのほせて八月十五夜の月くまもな  
くあかゝりけるににけてかへりにけりたゝひとりなをやまのいたゝきにゐてよもすから月を見てなかくける哥なりさ  
すかにおほつかなかりければこの哥をそうちなかめてなきをりけるそのちこの山をはをはずて山といふなりそのさ

きはかふり山とそ申けるかふりのこしににたるとかや

かひかねをさやにも見しかけゝらなくよこをりふせるさやの中山

この哥にけけらなくといふはこゝろなしといふむかしのことはなりかのかひのくにのふそくなりよこをりふせるとはことのほかにたかくなかき山なればよこをりにはゝかりてかひのしらねをふたけてみせねはよめるなりくやるといへることはするかのくにのふせりといへることはなりこのさやの中山はとをたふみとするかのくにとのなかにあるやまなり

ねらひするしつをのこやにしなへたるやさしきこひも我はするかな

ねらひといふはしゝをとることなりましはといへるこのはをりあつめて人をかざりて人のやうにみえぬほとにかざりなして山にたてたればしかの人も見えねはうちとけてよりくるなりさてちかつくをりにいるなりしなへたるといへるはさすといふことはなりこしにやをさしたればやさしとはそへよめるなり

月よめはいまたふゆなりしかすかにかすみたなひく春たちぬとか

月よめはといふは月なみをかそふれはといふをりし<sup>な</sup>かすかといふはさすかといふことはなりとしのうち<sup>な</sup>に春たちけるとしよめるなり

ゆきをゝきてむめをならひ<sup>こ</sup>そ足引のやまかたつきていゑるせるきみ

やまかたつきてといへるは山のふもとにといへるなり

我宿のそとにもたてるならのはのしけみにすゝむ夏はきにけり

そともといへるはしりへといへることはなり

いさゝめにときまつまにそひはへぬる心はせをは人に見えつゝ

いさゝめにおもひしものをたごうらに咲る藤なみひとへゝにけり

いさゝめといへるはたゝしはしといへることはなり

夏かりのたまえのあしをふみしたきむれゐるとりのたつそらそなき

たま江とはゑちせんるイのくにゝあるところなりあしはあきかる物なるをとくかりほとになるあしのあるをなつかりをきてつみをきたるうへにとりのむれるなりたまえとはたまの江といふなりみつのあるえに〇はいあらすないつかりといへるはしめのいへもつイしもかりかねのなつまであるをいふそともいひし人ありこれイこわもやまのひかことにこそかりかねならばすゑにむれゐるとりのといはむにもあしくきこゆ「又ししかりのにはかにいてきたらむもこゝろえすこれらかきたにこそこゝろ得たるひと心得ぬ人は見ゆれ」

神風やいせのはまをきをりふせてたひねやすらんあらきはまへに

君か代はつきしとそ見るおもふイ神イ秋風やみもすそ川のすまんかきりは

秋風といへるはふくかせにはあらず万葉集にかみかせやときたれはもしにはかられてふくかせとよみたる人あまた  
きこゆもろくのひかことにや神の御めくみといへることなりさらはい勢とかきるへきことかはこと神にもうかまむ  
にとかあるへからすといひかしかはかゝることはふるくよみつるまゝにておそろしきにえ〇よまぬなりこのころの人  
もおちなくよむものあらはよまれてこそあらめとそ申さるとそうけ給はりしはまをきとよめるはおきにはあらずあし  
をかのくにゝははまをきといひならはしたるなりみもすそかはとはかの大神宮の御前になかれたるかはなりいかてこ  
のかははいまゝてよみのこしてをきたりけんとそさねつなは申しか

みちのくのあさかのぬまのはまなかつみかつ見る人のこひしきやなそ

かつみといふはこもをいふなりかやうの物もところのなもとところにしたかひてかはれはいせみのくにゝはこもをかつ  
みといふなめり五月五日にも人のいゑをにあやめもはふかてかつみふきとてこもをそふくなるかのくにゝはむかしさう  
ふのなかりけるとそうけたまはりしにこのころはあさかのぬまにあやめをひかするはひかことゝも申つへし

はなかつみめならふ人のあまたあれはわすられぬらんかすならぬ身は

これらははなゝとつみいるゝこなめりこれらかく申ましけれともはしめのうたにまきるれはかきて候なり

ちりぬへき花みるほとはすかのねのなかきはるひもみしかゝりけり

すかのねのなかくといふあきのは月見ぬ人のいふにそ有ける

これはやますけのねを申なめりこれかぬいものゝほとよりもなかなめり

わかことヤイにいなをほせ鳥のなくなへにけさふくかせにかりはきにけり

いなをほせとりとはよくしれる人もなしにはたゝきと申とりなめりすゝめと申人もあれともすゝめはつねにあるとりなれはいまはしめてなくなへな申イとうへきにもあらはこのにはたゝきといふとりはとつきをしゑとりと申なるリイそれにつきて心ある哥

あふ事をいなをほせ鳥のをしへすは人をこひしにまとはさらまし

この哥をか鳥のなにおもひあはするなめり

いくはくの田をつくれはかほとゝきすしてのたをさをあさなくよふ

してのたをさとは郭公を申なめり

すかるなく秋の萩原あさたちてたひゆく人をいつとかまたむ

すかるとはしかを申なめり

はなちとりつはさいきのなきをとふからにかてくもるをおもひかくらむ

これはかひなとしたるとりのつはさいきもなくをはなちなとしたるをよむなり

わすれなるときしのへとそはまちとり行ゑもしらぬあとをとゝむる

これはちどりのうたなりまぎるればよきて候なり

もゝちどりさへつる春は物ことにあらたまれとも我そふりゆく

我〇とのえのみもりはむもゝちどり春はくれとも君はきまさぬ

はしめのうたにさへつる春とよめるはうくひすなりつきのうたのえのみもりはんといへるはもろくのとりといへるなりすいなうにうくひすをもゝちとりとかけるにつけてうくひすとこころ得てはあしかりなん

たかみそぎゆふつけとりそから衣たつたの山にをりはへてなく

ゆふつけとりにはとりをいふにはとりにゆふをつけて山には夏まつりあるとかや

夏くれはやとにふすふるかやりひのいつまで我身したもえにせん

足引の山田もるこかおくかひのしたこかれのみわかこひをらん

かやりひとはなつになれはかたるなかにはかと申むしのおほかれはやとをとをくのけてひをたくなりうるのくられはひのけにつけてそこにのみつとふなりよもすからたけはとみにもえぬものをあつめてしたにひをつけたればきらかに〇もえす又きえもやらねはしたこかるなどはよそへてよめるなめりおくかひもをなしことにやすくもひさやうのことなめり

かすかのゝとふひのゝもり出てみよ今いくかありてわかなつみてん

これはむかしかすかのひのとひければおそりをなして野もりをすへてまもらせけるとそ申このゝもりにわかなはつむほとになりたりやととひたる哥なめりこのことまこと「に」ならばとふひのゝもりといはんことはかすかののよむへきなめりほかのゝによみたらはひかことにてそあるへき

みまくほし我まちこひし秋はきはえたもしみゝに花さきにけり

しみゝと申ことはしけしと申ことはなめりおほくはきくさのえたにそよめるになふと申すもしをこのみかくはえたもたわたにはいと申ことはよめるにやあらむとみたまふるに万葉集

いへひらはえたもしみゝにかよふらんわかまつきみは○かへりひしぬかもこい

かうもよめるはなをしけしとよめるなめり

かのみゆるいへにたてるそかきくさのしかみさえたの色のでこらさ

そかきくといふはしようわのみかとのひともときくをこのませたまひてたかくをゝきにひろこりたらんきくまいらせたらむ人をしやうせむとせんしくたさせたまひたりければ世のなかの人我もくといとなみてひともときくをつくりてまいらせけるとそ申しゝきてひともときくをしようわきくといふなりしかみさえたのといふはしつえといふやうに、れはみまさかのくにのことはとそうけ給はるそかかきくとは黄イ○きくを申といふ人もあるにやなをひともときくにてこそかなふやうにはおをゆれひともときくはきのやうにたかき物なればしかみさえたもなとかなからんむらきくの



しかみさえたは心えすそれもしたえたはあれとうへのえたにうつもれて見えし又つちにつきてうへにあらむえたにはをとりなん物をそかきくをなをき<sup>くイ</sup>てそといひ<sup>ふからは</sup>はらつきなるひとときくとそいふへきをさはいはさめり

あま<sup>けイ</sup>、へしのをかのくかたちきよければにこれるたみもかはねす、しも

くかたちといふはむかしぬす<sup>みイ</sup>ひとをとふとてほとときといふものにゆをたきらかして、をさしいれさせてそこをさくらせけるより<sup>なイ</sup>それにあやまちたる人はてたたれけるにあやまたぬ人はあかみたにせぬ<sup>とイ</sup>にそありけるはしめのいつもしはところのな<sup>とイ</sup>り御神にいのり申てしとそ世のすゑになりてしとけなきこと、もありければと、まりにける<sup>とイ</sup>にや

から衣したてるひめのした<sup>こイ</sup>らひにあめにきこゆるつるならぬねを

したてるひめはあめわかみこのめなりそのおとこうせたとときかなしふこゑそらにきこゆるなり又つるのきはになくこゑなんそらにきこゆるといふことのあるなり

いくしたてみはすゑまつるかんぬしのうすのたまかけみればともしも

これはゐなかに田つくるをりにすることなりたのかみまつるときにこへいを五十<sup>さい</sup>はきみてたのくろといふところにて、さげなともそのれうとてきよくつくりまうけてまつるなりそのさげのなをみわけとは申なめりうすのたまかけとはまめつらぬきてうすのやうにしてかさりにするとそうけたまはる

我宿をいつならしてかならのはのならしかせをにいをりてをこする

かへし

かしはきのはもりのかみのましけるをしらてそをりしたゝりなざるな

これはとしこかいゑにありけるかしはきををりにつかはしたりければとしこかよみてひはの大臣にたてまつりける哥なりはもりのかみとはきのはをまもるかみのきにはおはするなり

おきなざひ人なとかめそかり衣けふはかりとそたつもなくなる

これはせりかはのきやうかうにゆきひらの中納言の御たかゝひにてたもとにつるのかたをぬひものにしてこのうたをやかてもしきにぬひてつけたりけるとそかきたるおきなざひといふはおきなざれとゝいふことはなり

桜花ちりかひまかへおいらくのごむといふなるみちまとふかに

おいぬといへることをもしをたゝさむとていへることはなり

おもひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたくあざりせんとは

これはをのゝたかむらをきのくにゝなかされてはへるける時よめる哥なりひなといふはるなかをいふなりあまのなはたくとはあまのすむところによりて物もとめてはんとはおもはざりきとよめるなり

たまくしけふたとせあはぬ君かみをあけなからやはあはんとおもひし

これはらうゑいしうにある哥なりをのゝよしふるといふ人のうてせんしをか〇ふりてにしのかにゝまかりむかひてお

もひのことくうちえてたてまつりたりけるにその、ちしやうか<sup>うイ</sup>○ふるへしとおもひけれとそのこときこえてふたとせ  
になりておほかたにしるすへきとしにてありければしゐをしてくちおしくしやうにしゐをしてことしことイ従上をしたらま  
しかはとおもふらむとてきむたゝの弁のつかはしたりける哥なりあけなからやといふは五ゐのうゑのきぬといふなり  
さてあけといはんとてたまくしけとはおもひよりたるなり

河やしろしのにをりはへてほすころもいかにほせはかなぬかひさらむ

行水のうへにいのれるかはやしろ河波たかくあそふなる哉

このかはやしろのこといかにもしれる人なしたゝ人のをしはかり申はみつのうへに神のやしろをいはひてかくらをす  
るなりされはかはやしろとはみつのうへにあるやしろといふなりつきのにてはさもこゝろえつへしはしめの哥はすゑ  
にかくらのよしもいはすまことにやしろイ同めりとおほゆることはもきこえすおもひかけぬころもをほしてひさしくひ  
ぬよしをなけきたりかくらにはいかにかなはずつらゆきかしうにもなつかくらのことかけりたゝをして哥こゝろイのころを  
ゆるに河やしろといふ<sup>はイ</sup>○やしろをかはのうへにはひたれはかはのみつもはやく神もいちはやくおはするによそへて  
とうよりほすといへるなめりしのにといへることはしけくひまなしといへることはつねにつかへはぬのををりてほす  
にもひさしくひぬよしをなけきたるなめりとそこゝろえたるさらはつきの哥そゝろイそゝろたかひぬる

あけのそをふね

たひにしてものこひしきに山もとのあけのそをふねぎしにこぎ行

あまのはしふね

久方のあまのさくめり<sup>か</sup>はしふねのとめしたかつはあけにけるかも

あからをふね

奥にくくあからをふねにつとやみんわかき人みてときあけむかも

いへてふね

さきもりのほりて<sup>江イ</sup>こきいつるいへてふねかちとるまなくこひやわたらん

たななしをふね

いり江こくたなゝし小ふねこきかへりおなし人もこふるころかな

あしからをふね

もゝつしまあしからをふ<sup>本ま、  
ねイ</sup>○あるにおほみや<sup>めイ</sup>こそかならめこゝろはおもへと

もろこしふね

あやしくも袖にみなとのさはく哉もろこしふねもよせつはかりに

まつらふね

まつらふねみたれをほイそをのみをはやみかちとるまなくおほくゆる哉

おほふね

おほふねにまかちしゝぬきこくほとをいたくなこひそしイしにある如何如何イに

これはさせることなけれとふねの哥あまたあれはかきつけたるなりたかせふねなどはつねのことなればとゝめつ

天の河あさせしら波たとりつゝわたりはてねはあけそしにける

この哥古今の歌なりこの哥のこゝろはあまの河のふかさにあさせしら波をたとりてかはのきしにたてるほどにあけぬ  
れはいまはいかゝせむとてあはてかへりぬるなりさることやはあるへきたゝ人すらひとゝせをよるひるこひてたま

くゝかならずあふへきよなれはいかにしてもかまへてわたりなんものをましてたなはたと申はさうくイすくにおはします

やあまのかはふかしとてかへりたまふイ〇へきにもあらしいかにいはんやそのかはにはかさゝかはしイきありてもみち本マ、のイ〇はし

ありありともイともいひわたしふねはやわたせともいひきみわたりなはかちくしてよともよめはかたくイにわたらんことさ

またけあるまし「わたしもりの人をわたすはしるしらぬやはあるたなはたのこゝろさしありてわたらんあらんにわた

しもりなとてかはいなひまうさん」又かはもさまでやはふかゝらんかたくイ〇こゝろえられぬ哥なりまたひかことをよみ

たらんに古今にみつねつらゆきいれむやたとひかの人くこそあやまちていれめえんきのみかとのそかせたまはさら

んやはもし古今のかきあやましかとおもひてあまたの本のよきとおほしきをかりあつめて見ればよきとおほしきには

わたりはてなはとありをろさかしき人のかきけるにやあらんわたりはてつれはとある本もありおほつかなきに人にたつね申かはこれはわたりはてねはとあるへきなりわたりはてつれはとあるは古今のあやまりにこそあめれかやうのことはふるぎ哥のひとつのすかたなりこひかなしひていつしかとたらるまちイつすることはひととせなりひをかそふれは三百六十日なりたまくまちつけてあくヘイることはた、一夜なりそのあへるほどのあなかちにすくなければまことにはかはをわたりてあひたれともあはぬかやうにおほゆるなりされはあひたれともほとのすくなければまたあはぬこ、ちこそすれなとよむへけれと哥のならひにさもよみ又あひたれとも人にまたあはぬさまによむなりこれのみかは、なをしらくもにみせもみちをにしきににせなとするもひとへにそれにこそはなすめれことかくものいふ人のいふことはにたるものをもひとへになしきかぬことをもひとへにき、たるやうにこそはいふめれそれかやうに哥をもあひなからあはすとはいふなりとありしにこそよあくこ、ちしてうれしくおほえ候しか

昨日こそさなへ取しかいつのまにいな葉もそよと秋風そ晴

この哥又おほつかなし四五月にうへたる田は八九月にこそいてきと、のをりていなはもそよにはなみよるイたらめきのふさなへにてうへたらんなへの一夜をへたて、いなはもそよにはなみよるへきことかはあやしにイきに人のたつねまうし、かはこれは一夜をへたて、秋かせになみよるにはあらすた月日のほとなくすくるをいはむとてことたかくきのふとはいふなりきのふなとおもふことのかそふれはとしつものにけりなといふことのことしかやうに心えつれはことほり

おほくそきこゆる

しほみては入ぬるいそのくさなれや見るひすくなくこふらくはおほし

この哥はひかことにやと申つへしいそのくさをこひしき人もたとへてしほみちぬれはうみのそこにかくれてしほひぬれはいてくるを見るなんまれなるとよめるかうみのしほのみちひることに一日にいちとかならずのことなり時こそ月のいているにしたかひてはかはれともつみにみちひることはあへてたゆることなしこの哥の心はみちては日ころありてたま〜ひてはた、一日ありて又みちぬれは十日廿日もありてひることのたまさかなるやうによまれたるなりこれはおほきなるあやまりとうちきくは<sup>き</sup>おほゆれといそのくさはしほみちひるにしたかひてあらはれかくる、ことはおなしほとあれとあけくれめもかれす見まほしき人のたまさかにもかくれみえぬる<sup>かい</sup>つねにしほのみちてかくしたるやうにおほゆるなりたとへはいたきところのものにあたりたるかことしまことにはたまさかにあたれとつねにあたりにいたきやうに「みえの」みえぬことはおなしほと<sup>なれと</sup>あかぬおもひのあなちになれはみることはなをたまさかにおほゆ<sup>る</sup>とよめるはめてたくこそきこゆれこの哥いとしもなから<sup>ん</sup>にはよろつのしうにはいりなんや

なのみして山はみかさもなかりけりあさひゆふひのさすに<sup>そい</sup>こふかも

此うた心得かたしなからんかさをはあさひゆふひなりともなにをかさ、むなにしおは、といひてこそひのひかりにもさ、せめみしかき心にはをよはすそきこゆるざれともあさひゆふひのひかりまことにてをさ、けてかさをさすものな

らはこそそのかたはもみえさらんかきをはなにをかきゝむともいはめたゝひのひかりをさす「ふ」といふものなれは  
かたちみえすともなはかりをもなときゝさらんこれはあなからのことなりちイ

人ならしむれはいねいのちふきをほむらにてやくすみそめの衣きよ君

これはとしのふるなかされけるときなかさるゝ人はふくのころもをきてまかるなれははゝのそめてつかはすとてよめ  
るなりすみそめのきぬといふはいろのくろければいふなりまことにすみしてそむるにはあらずこの哥の心はおこすゝ  
みしてふくのころもをそむるやうによめるなりたとひすみしてそむるにてもすゝりのすみしてころくめゝいかてかお  
こすゝみしてはそめむ「いかなることにかおもへとふくのきぬはすみそめといふにはあらずまことにも」むかしはす  
みしてそめけるを此ころの人のふしかねしてはそむれはこの哥よみけんころほひはすみしてそめけるにやあらんおこ  
すゝみとすゝりのすみとのことはさもおほめかれたることなれとかやうのことつねのことなりすゝりのすみをよむへ  
からんところにおこすゝみよみたらんにとかなしやかすともくさはもえなんとよめるはひのもゆるとくさかれのいま  
めくみいつるとはことゝにはあらずやされともかうもよめるはあみのひとめをつらんつむいなとよめるうひはいをのなゝ  
り人のひとをこふるこひはことゝなれともしのおなしことなれはかよはしてよむつねのことなり又すゝりのすみも  
やかすやはあるすゝりのすみをつくるにはまつのきをもやしてそのけふりをとりてつくるものなれはたゝすゝりのす  
みをやくすみそめとよみたらんにとかあるへからすとうけたまはりしにはけにさもとこそおほえ候しか



神まつるうつきに咲るうの花のしろくもぎねかしらけたる哉

この哥の心ははしめに神まつるといひてすゑにしろくもぎねかといへりしらくといふことはよねをしろくなすこと  
 なりぎねをいふはかんなきのならりざらはかんなきのよねをしろむへきにやさや○のことはあやしのしつめかする  
 ことなりかくらなとするをりかんなきやをとめなといひてからきぬなときていつくしくめてたきものなりさやうのこ  
 とすへしともみえすいかなることにかとてなかころの人く<sup>にイ</sup>にたつねしよ「は」その人く<sup>にイ</sup>もおほめきてたしかにも  
 申さすかななきといふもの○やをとめする<sup>もイ</sup>ときにもそいつくしく見ゆれまことにはしつめといひつへきものなれは  
 なとかしろくもぎねかともいはずらんといへる人もありまたよねしらくるうつはものくにぎねといふものありけれ  
 かよねをはしろむるものなれはさよる<sup>むイ</sup>にやあらんと申す人もありきされとそれをよまはまたそれかくのものあるへし  
 ひとつく<sup>もイ</sup>なればことかくるものなりとてきくあほ○ほゑみきたうのはなのうつきにさけるものなれはしろしと  
 いはんとてしろくもぎねかとはいふなりまことにけふのやをとかしろむるにはあらずはなかさといふものあれはうく  
 ひすにぬはするはまことにうくひすやはぬふらんた<sup>へきイ</sup>、春「の」うくひすもありうくひすのかさきぬふてふなとはよむ  
 なりされは神まつるといふにひかされてかんなきにしらげせんとかなしとぞ

雪のうちに春はぎにけりうくひすのこほれるなみた今やとくらん

このうたにはるく<sup>はイ</sup>といふことおほつかなし驚のなかむにはなみたやはあるへきとうたかはれしを人の申はゆきのう

ちにはるはきにけりとよむはとしのうちにといへるなり雪は春もふるものなれとむねとは冬ある物なれば冬といはん  
とてゆきとはいふなりふるとしにはるのたちけるとしよめる哥なりとしのうちには春はきにけりといは、こそそとや  
いはむといふ哥に、たればそれにたかへむとてゆきのうちにとはよませたまひけるにやうくひすのなみたはなけれと  
もなくといふことにひかされてよめるなりかりのなみたやのへをそむらんといふもなみたやはあるへきされとなくと  
いふにつきてなみたとよまむにとかなししかはあれとうくひすのなくはさへつる也たなくにはあらずもたひなみたはあ  
りともいつくにとまりてか冬はこほりて春ひんかし風にあたりてとくへきそら事ともなればあやしともいひつへけれ  
とも哥からのめてたければ古今にいりておそろしきなり又この哥は古今にいらは春のはしめいにそるへきを〇をくにある  
うたかひあることなりなをさたのこりたる哥也

山たかみひともすさめぬ桜花いたくなほわひわそ我みはやさん

この哥はこゝろははなわれを人みすとてわひたるさまによめり人なりともさやはあるへきましてこゝろもなからむは  
な人みすとてわひんあひなくこそはきこゆれされとこれこそは心なき物に心をつけものいはぬものものをいはする  
は哥のならひなりといふはこれにはあらずやふくかせははなのあたりをよきてふけなといひやうよやまて山郭公ことつ  
てんなといふはかせをよきよといひほとゝきすをまてといはんにまさにかむやはされとうたのならひなればこれに  
て心うることになとてかははなも人見すとてわひさらむ

みる人もなき山里の花の色はなかく風そおしむへとなる

もろくのはなかせうらみてのみこそあるにこれはかせのはなをおしきたるおもひかけぬことなりやまさとにかせのおしみともめたるはあらずほかのはなはみなちりはてぬ○にこの山さとの花のさかりなるはかせのふかさりけるなりかせはふけはところもさためぬものなるにこれにしも風のふかさりけるはかせのおしみけるなめりといふなりこれひとつの哥のすかたなり

山もりはいははなん高砂の尾上のさくら折てかささん

これはこと「の」はのことくならはせせい法師かはなの山といふところにて花を折てよめる哥なりたかさこのおのへといふところははりまのくに、あるところなり花山とはこのやましろのくに、あるところなりまつもやわれをととみるらんともしひ尾上のまつとわれとなりけりとよむはかのはりまのくにのたかさこにてよむなりまたやましろのくにの花山にてまた、かさこのおのへのとよめる哥はなしこの哥の心をもてたつぬれははりまのたかさこはこほりのな、りおのへといふはさとのななりそのはまのつしにまつらひときありしをよみそめてよめるなりそのせいか哥はおほかたの山のなをたかさこといふことあるなりおのへといふはやまにおといふところのあれはそのおのへにといふなりあれもこれともにとかなししかるにてはいかならむところにもやまをよまむにはは、かりあるましとそきこえしされはにやおのへのさくらとよみて候き

ときしまれいなはのかせになみよれるこきさへ人のうらむへしやは

御かへし

いかてかはいなはもそよといはさらむあきのみやこのほかにすむみは

これはむらかみ御時に齋宮の女御と申ける人のなかをかといふところにすみたまひけるときいつかまいらせたまふへ  
きなとをとつれうさせたまひたりけるときいか、御かへりにうさせたまひたりけむうさせたまひたりける哥也この歌  
のこゝろきかさらん人のさとるへきにあらすきさきといなこまろといふむしとはものねたみせぬものとふみに申たる  
とかやこの御かへりにもねたみのけしきやありけむとかく申させたまひたりけるなりいなこまろといふむしはたの  
いねのいてくるときこのむしもいてくれはいなこまろといへはこのむしとおほしくていなはのかせになみよれることは  
よませたまへるをこゝろ<sup>こゝろイ</sup>をえて我はきさきにもあらねはなともねたみもせ○らんとおほしてあきのみやこのほかなる  
みはとよませたまへるなりきさきのそませたまふけしきなりとよの人申ければさて御しふにはのそかれにけるとそう  
けたまはりし

恋わひてねをのみなけはしきたへの枕のしたにあまそつりする

哥はことたてのみよめはこれもつねになみたのおほくつもりてうみとなりてあまもつりしつへしとよめるこゝろ<sup>えイ</sup>えて  
ことのほかのことたりことなと人もうすにかみにつらぬかれたるなみたをばあまのつりといふことのありければそれ

をよむにてはことゝか<sup>たい</sup>ことにはあらざりけりとそ人申けるそのすいなうのものゝいみのまきを見ればかみにつらぬか  
れたるなみたを<sup>本ノマ、</sup>はあ〇のつりといへる<sup>まい</sup>ことかけり

雪降てとしの暮ぬるときにこそつるにもみちぬまつも見えけれ

これはとしのさむくしてまつかえをしるといふこと<sup>サフラフ</sup>の候なりかしこき人もたゝこともなきをりはかしこきことをろか  
なることみえすまつのきかゑのきなともよろつ<sup>の</sup>きのあをきをりはなにとも見えぬかふゆになりてもろくゝのきのは  
のおちぬるときにまつ<sup>の</sup>きともかゑのきともみゆれはこのきなんまとのきといふことのあるをよめるうたなり

夕されはみちも見えねとふる里をもとこしこまにまかせてそ行

これは管仲といふ人の夜みちをゆくに我はくらさにみちも見えねともこまにまかせてゆくといへることのあるをよめ  
るなり老馬智といへることはこれより申とそ

をのゝえはくちなはたれもすけかへむうき世の中にかへらすもかな

これはせんにむのむろにこをうちるたりけるにきこりのきてをのといふものをもたりけるをつかへてこのうつ五を見  
けるにそのをのゝえのくちにければあやしとおもひてかへりていゑを見ればあともなくむかしにてしれるひともなか  
りけるとかや

ぬれてほす山路のきく<sup>の</sup>つゆのまにいかてか我はちよをへにけむ

これもせん人のことなりつゆのまにといふはたゝしはしといふなりそのほとにちよをふとよめるなり

たちぬはぬぎぬきし人もなきものをなにやまひめのぬのさらすらん

これも仙人のきぬはぬひめのなきといへることをよめるなり

心さしふかうのさとにをきたらはこやのまつをは行てみてまし

はこやのまつといふはこれも仙人のゐ所也ふかうのさとゝいふはなエイいエイはぬことのおほえをほしきところのめにみゆる事のあるなりさらましかはかの仙人のすみかはみてましとよめる也

わきもこかくへきよひなりさゝかにのくものふるまひかねてしるしも

これはあふみのくにゝありける人のむすめのことのほかにかたちのよくてひかりのころもをとりてめてたきありき  
こしめしてみかじめしければたてまつりたりけるをかきりなくおほしてよのまつりこともせさせたまはさりければお  
やよをおそりてひきこめてはるかなるところにこめすへたるをきこしめしてたひくめしにつかはしたりけれとまいら  
せさりければかしこまりける人をめしてつかひにつかはすとてかならずくしてまいれもしまいらすはつみせんとおほ  
せられければつかひほしいるををそすこしふところにもちたりけるかの女のもとにゆきてすみやかにまいれといふせ  
んしのつかひなりされときぎくのやうによもまいりたまはしまいりたまはすとてかへりまいりたらはかならずくひ  
めされなむすとていかにもしなむことはおなしことなればたたこのにはにてしなんととてものもくはて十日はかりには

にふしてみそかにふところにもたりけるほしいゐをくひてありけるをおや見てのことふひなりせんしのつかひこゝにてしなはかへりてつみかふりなんはやこのつかひにつきてまいりねといひければわれはもとよりまいらしとおもはすおやのとりこむれはこそあれとてつかひにくしてまいりぬみちにとくまトイ「い」りてぎきにたちてまいるよし申せといひければそのよし申に「たて」まいりてまちけるほとにくもといふむしのかみよりさかりてそてのうへにかゝりたりけるをみて行幸などもやあらんすらんあやしきことのあたかなと申けるほとにみかとおはしましたりけるとそそとをりひめと申うたよみはこれになんありけるすみよしにへちの神にておはしますとそうけたまはる

我恋はちひきのいしのなゝはかりくひにかけては神のもろふし

ちひきのいしといふは千人してひくいしといふなりなゝはかりといふはその「ひしなゝいしなゝつはかりといふ也イ」りといふなり」くひにかけてはかみのもろふしといふはそのいしななつをくひにかけてはかみもえおきあかりたまはしとおもふいしにもまさりたるこひのおもさなりとよめるなり

あひおもはぬ人をおもふはおほてらのかくゐのしりへにぬかにつくからと

これはむかしのてらにはかくゐ鯨をつくりてすへたりけるなりそのかききイにむかひてをろかなる人のほとけのおはするそとおもひてぬかをつきてたてまつる事也それなむおもはぬ人をおもふはにたるなりとよめる

てらゝのめかきまうさくをうへのをかきたりてそのこはらまはむ

これはいとしもなきをむなのこをほしかりてかやうに申こはすはたれかめみたてんとおほしくてよみたりけるにやあらむ

山里のたのきのさぬもく<sup>むへイ</sup>つきにをしねほすとてけふもくらしつ

たのきといふはたのあせのかたはらにあるたまりみつなりさぬといつるはちいさきいとともなりをしねといへる○たのいねともなりされはたのきのさぬなとすくひてあそふへきにいねをほすほとにけふもくれぬとよめるなり

かひそもいも<sup>せはイ</sup>そなへてあるものをうつゝの人にて我ひとりぬる

かひのふたをし<sup>てイ</sup>あるはめかひをかひといへるものゝあれはかひたにもいもせはあるにまさしき人にてひとりぬることをなけきたる哥也』れんかこそよのすゑにもむかしにもをとらす見ゆるものにては候へむかしはありけるをかきをかざりけるにや

みつね

おく山にふねこくをとのきみゆるは

つらゆき

なれるこのみやうみわたるらむ

これはみつねつらゆきとものにくしてまかりけるにおくやまにそま人のきひく「<sup>本ノマ、</sup>きひく」をとのふねこくにたりけ



れはしけるとそ

たゝみね

なはゝしのたゝぬところにかつらはし

としゆきの少将

つかひのをたにみふのたゝみね

これはたゝみねかさこむのつかひのをさにてありけるときとしゆきの少将ちんにはたれかさふらふとたつねければつかひのをさ本ノマ、にふのたゝみねとなのりシイをきゝてれんかにきゝなしてゑはしてすきけるをきゝてつけたると申つたへたる

女房

ほともなくぬきかへてけりからころも

きんたゝ弁

あやなぎものはよにそありける

これは延喜のみかとのかくれさせたまひたりける時きんたゝの弁五るのくら人にてはへりけるかあやのきぬともをぬきすてゝはへりけるをみて女はうの申たりけるとそ

よみ人しらす

たれそのなるとのうらにをとするは

さねかた

とまりもとむるあまのつりふね

つまとのたてあけしければなりけるうちにさねかたの中將のをとしければしらぬかほにイて女はうのしけるとそ

さねかた

あやしくもひさよりかみのひゆるかな

みちなかのきみ

こしのわたりに雪やふるらむ

うちわたりにてあしのひえければしけるとそ

まさひら

みやこいてゝけふこゝぬかになりにけり

あかそめ

とうかのくにゝいたりにしかな

おはりのくにゝくたりはへりけるときみちにて心ちそこなひてしはしとゝまりてはへりけるほとにこゝぬかになりければしけるとそ

ゐやうせい法師

まつまう<sup>あ</sup>とのこゑこそきたにきこゆなれ

けいはん法師

みちのくによりこしにやあるらん

ゐたりけるきたのかたにこゑなまりたる人のものいひけるをきゝてしけるとそ

なりつ<sup>ない</sup>ね<sup>ない</sup>

もゝそのゝもゝのはなこそぎきにけれ

きむより

むめつのむめはちりやしぬらむ

よりつな

いなりやまねきをたつねてゆくとりは

のふつな

はふりによいのつゆやをくらむ

よみ人しらす

春はもえ秋はこかるゝかまとやま

もとすけ

かすみもきりもけふりとそ見る

これはつくしのすいたのゆといふ所にてゆやのはしらにたれとはなくてかきつけたりけるをぎゝてもとすけかつけた  
りけるかのすいたのゆにてはかまとやまのあらはに見ゆるなり

やましろのやまとにかよふいつみかは

たゝきた

これやみくにのわたりなるらん

いつみかはと申かはの山しろよりやまとさまになれたるを見てせるなりみくにのわたりと申ところの山しろに候なり

かものなりすけ

しめのうちにきねのをとこそきこゆなれ

ゆきしけ

いかなる神のつくにかあるらむ

かものみやしろのうちによねしらけゝるをきゝてしけるなりとぞ

るやういむ法師

をきのはにかせのけしきのしるぎかな

イ同  
ゐやういむ法師

かせになひかぬくきはなけれと

みちまざの三位

もろともにやまめくりするしくれかな

ねイ  
かねつなの中將

ふるに敬きかひなきみとはしらすや

ふたりくして百寺のうちありきけるにしくれのしければしけるとぞ

せんりむしの僧正

春のたにすぎいりぬへきをきかな

宇治殿

かのみなくちにみつをいれはや

これはうちとのにてあやしのをぎなの田のなかにたてりければかのそうしやうの申けるとそ

そうくわんせむ

日のいるはくれなるにこそにたりけれ

たいらのためなり

あかねさすともおもひけるかな

きやうせん

このとはひをけにひこそなかりけれ

永源

わかみつかめにみつはあれとも

これはおほみやのみんなふ卿の御もとにてはへりけるにひをけに火なかりければしけるとそ

よりよし

きくの花すまひくさにそにたりける

よりなり

とりたかへてや人のうへけん

すまひはとるものなれはや申けるにや

きむすけ

おほつかなたれとかしらんふたこつか

さかみ

はゝそのもりやしらはしるらん

ゑしむあざり

うまけにもくふうしのくさかな

永源

ひつしのおさるのかしらに成ほとに

きやうせん

むめのはなかさきたるみのむし

やくいぬまろ

あめよりは風ふくなどやおもふらん

これはきやうせんりしのもとに人／＼まできてあそひけるにとをはかりなるちこのみのむしのむめのえたにつきたりけるをみてしたりければ人／＼えつけさりけるにやくいぬ「まろ」と申けるちうとうしのまへにゐたりけるかつけたりけるとそきてそのわらはをは心ありけるわらはとてほうしになしてよろしきものになむつかひける

しけもと

ものあはれなるはるのあけほの

修行者

むしのねのよはりしあきのくれよりも

なりみつ

おくなるをもやはしらとはいふ

くはんせん

みわたせはうちにもとをはたてゝけり

山のゐのふたきのざくらさきにけり

あかそめ

みぎとかたらん見ぬ人のため



百寺うつとてひんかし山のへんにありけるに山のるといふところさくらのさかりにさぎてはへりけるを見てともな  
りける人のしけるとそ

かはらやのいたふきにてもみゆからな

「もくのすけ」すけとし

つちくれしてやつくりそめけん

さかへまかりけるみちにてかはらやをみてしはへりけるなり

「せうに」ためすけ

つれなくたてるしかのしまかな

くにたゝ

ゆみはりの月のいるにもおとろかて

しけまさのそちの時はかたといふところにてさけなとたへけるについてにしけるとかや

もりふさ

きのふきてけふこそかへれあらずより

つねみつのわう

みかのはらゆくこゝちこそすれ

これは爰ちせんにてちゝのともにあすかのみやしろにまいりてまたの日かへるとて申ける

しけゆき

雪ふれはあしけに見ゆるいこまやま

かねすけ

いつなつけにはならんとすらむ

これはためまさかかうちのかみにてはへりける時ゆきふりたりけるあしたにつれくなりければさうしたてこめてら  
うと申ウイともあつめてさけなどのみけるにみなものしけゆきかもトイのへまかりけるみちにてまうてきたりければよろこ  
ひさはきてきやうしけるにをくゝゑひてさうしをあけてなかめやるにゆきにうつもれたるやまの見えければあれ  
はいつれの山そとたつねければあれこそはかうみやうのいこまやまよとためまさかいひけるにきゝてかく申たりける  
をきゝてたびくゝゑいくジイしてつげんとしけるにいかにもえつけさりけるけしきを見てやくしあるぎけるあやしのさふ  
らひのつけたりけるけしきのみえてしはふきたかやかにしてひとよりもけにゐいてゝしければしけゆきかうふんこそ  
つけけにはへれといひければかたはらいたくみくるしきことなりとをしこめていはせさりければそのゝちなをえつけ  
さりければしはしけしきしていはさりければしけゆきしきりにせめければいひいてたりけるためまさしたなきケイしてあ

さみけりしけゆききゝけるまゝにまひければためまさたへてきぬゝきてかつけるまことイさとにぎむけなりつるにたちまち  
にきてゑみまけてしあるきけるとそ申つたへたる

よりつな

かもかはをつるはきにてもわたるかな

のふつな

かりはかまをはおしとおもひて

ふたりくるまにのりてうちとのへまいりけるにあめのふりけるころにてかもかはのいたくみつのまさりたりけるにお  
とこのはかまをぬきてさゝけてわたりけるを見てしけるとそ

きよいゑ

しはかきのぎとこれをいふかも

ためなか

むヘイめリイこそはくらけのむまにおほせけめ

これは十月のつひたちころにもみち見にまかりけるにくりけなるむまにしはをおほせてあかくなれるかきをえたなか  
らしはのうへにさしたりけるを見てしけるとそ

さねぎよ

いぬたてのなかにおひたるゑのこ草こゝとみをきてのちにひかせん

なにゝあゆるをあゆといふらん

まさふぢ

うふねにはとりれし物をおほつかな

ひのこあゆといふものをおこせたりけるをみてまへなりける人のいひけるとかや

かんぬしたゝより

ちはやふるかみをはあしにまく物か

しきふ

これをそしものやしろとはいふ

これはしきふかゝもにまいりたりけるにわらうつにあしをくはれてかみをまぎたりけるを見てしけるとそ

よりみつ

たてかるふねのすくるなりけり

さかみかはゝ

あさまたきからろのをとのきこゆるは

これはよりみつかたちまのかみにてはへりける時にしとみあけゝるほどにまへのけたかはよりふねのくたりけるをいかなるふねのくたるそとゝひければしとみあけさしてはしりよりてとひければたてかりてまかるふねなりと申けるをききてしけるとそ

かねなか

をそろしけなるをにやなきかな

のりなか

みなくちはあしはらふかきこゝちして

うちとのゝ御ふねにたてまつりてふしみといふところへおはしましけるにをるやなきにイといふきのもとすぎさせたまひけるにしけるとそ

いゑつな

ふかをくイさにをさなきちこのたてるかな

のふつな

そのそイかはらけのむまにくはるな

これはうちとのうちへおはしましけるにこそんしてすこし御祀<sup>さきイ</sup>たちてまかりけるにふかをさのまへにてちこのふたつはかりありけるかおほちなかにはひいててやをらはひあかりてたてりけるをまへ〇とをるとて申けるをいゑつな  
かゝはらけのむまにのりたりけるを見かへりてそのちこのまへに「いま」いきかかりけるときに申けるとかや

みやうゑん法師

たにはむこまはくろにそありける

みやうせい法師

なはしろのみつにはかけと見えつれと

田にくろと申ところのあるにむまの<sup>にい</sup>もくろと申むまのあれはなはしろのみつにはかけと見えつるにくろにそありける

といふはまことにたくみなり

女はう

まなこゐのほりかねはかりふかけれは

たかくらのあまうへ

めみつかとこそあなつられけれ

人のやせてめのふかく見えければたはふれてせられけるにや

かねなか

なしといひつるたひは君はありけるは

つねひら

さかひよりきのふもてきたるなり

これはつねひらかいつみのくに、しるところのさかひといふところありけるなりよきたひのつねよみえけるにこのころはれいのたひやあると、ひけるにこのをとは見えすなんと申てほとへすととりいて、はへりければしたりけるとそたはふれてくをあしくよみなしてあるをすゑにもまたくのあしきをことにてかたりつたへて候なめり

よりいゑ

あゆはたゝはたゝかちゝてまいらせよ

ゐやういむ法師

しふぎよしとてまたなしふぎぞ

これはよりいゑかもとにて人くあそひけるにあゆはたゝと申しを、さかなにしてはへりけるにゐやういむと申ほうしのありけるにしふぎといふさふじのものをさかなにてありけるかまことにあしくおほへけれとこれあしともいはて見るたりけるにあゆはたゝのいとよけなるを人くくひのゝしりてかく申たりければきゝもあへすよろこひなからつ

けたりけるとかやいかのせんしやすなか」とこのさに候てかたり候しれんかはよのすゑにもむかしにもをとらすそ  
みえ候

中納言殿

かりきぬはいくのかたちしおをつかな

とししけ

わかせこにこそとふへかりけれ

わかせことはおとこなりおとこはいかてかはしらんといふなん候とかやおとこは女をわかせこといひ女はおとこをわ  
かせこと申也

わかせこにみせんとおもひし梅花そいそれともみえす雪のふれは

これある人かをんなによする哥めいなり

我せこかころもはるさめふることへのみとりそ色まざりける

これもつらゆきかうたたてまつれとおほせありけるときよめる哥なりおとこきぬをはらむやはこれのみかは万集には  
かよひてよめる哥あまた見ゆることこいしちこそしはへれつまこそめといふもしをかきたれはおとこ申にくけれそれも  
おとこをつまとよめる哥あまたあり



むさしのはけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり

この哥もいせものかたりにおとこ女をぬすみてむさしのをゆくにこのゝにはぬす人こもりてのをやかむとしけるととき  
女のよめるとかけり

けさはしもおもはん人はとひてましつまなきねやのうへはいかにも<sup>と</sup>

本ノマ、

これはしきふかやすけにすてられてなげきはへりける時ゆきのあしたによめる哥なりこれらを見ればおとこをもなと  
か〇まさらん」と人申をんなをつまとは<sup>本ノマ、</sup>也<sup>トイ</sup>

わかことにちとりしはなくおきよく我ひとりつま人にしらせし

これも女の哥なればさためもなし

春のよのやみはあやなし梅花色こそみえねかやはかくるゝ

あやなしといふことははやくなしといふことはなりとそこの哥の心にてはみゆるをふたむら山もこえずなりにきとい  
ふ哥の心にてはあやにくにこひしかりしかはとよめりとみゆこれらを見ればともかくも申へきにや

あひみぬもうきもつらきもから衣おもひしらすもとくるひも哉

したひもとくといふことにはまたさためなしこの哥の心にては人をうらむ人のしたひもはとくるときこえたり

こひしとはさともいはいしたひものときむを人はそれとするなん

この哥の心は人にこひらるゝ人のしたひもとくるときこえたり

めつらしき人を見むとてしかもせぬ我したひものつけわたるらん

これはめつらしき人を見むとてとくるときこえたるさためなきことやあらむ

時鳥鳴やさ月のあやめ草あやめもしらぬ恋をするかな

あやめもしらぬといふことははつねに人のいひならはしたることはなりよしあしもしらすといふことはなれはいかに  
もこと／＼おほえずとよめるなりさ○ふをライあやめといふはさうふのなにはあらずあやめといふはひとつのくちなはの  
なゝりそのくちなはにゝたればさうふをライあやめと申はたゝあやめとよみてくさといふもしよますはくちなはをよめ  
る哥にてそあるへきなをさうふをよまはあやめくさとつづくへきなりとそなころの人／＼申けるあやめみつあふと  
いふことときこゆそれをおもへはさもときこゆ

つくま江のそこのふかさをよそなからひけるあやめのねにてしる哉

これはらうせんほうしの哥なりこのうたよみたりけるをりに人／＼さたしけるとそうけたまはる

はちすはのにこりにしまぬ心もてなとかは露を玉とあさむく

はすをはちすといふもたゝいふにあらすすのみのほちといふむしのすにたればはちすといふなりされはこれはは  
ちすといはすともたゝはすとよみてもありぬへし

もかみ川のほれはくたるいなふねのいなにはあらずしはしはかりそ

このかは、いつものくに、あるかはなりことのほかにはやき川にて四五日はかりにのほるをくたれはた、一日  
にそくたるイ  
そくなるされはのほりさまにはかしらふりてのほりかたければいなふねとは申すとかやいねをつみたるふねを申とも  
申にや

いたつらにたひくしぬといふめれはあふにはなにをかへんとすらん  
かへし

しぬくときくくたにもあひみねは命をなにのたにかのこさん  
あふにみをかふといふこゝろは心もえぬことなりうせなむのちにはあふともなに、かはせんときこゆれとあはんこと  
のたくひなくうれしかりぬへければそれをよくいひとらむとていふなめりかへしの哥にたにといふことははためにと  
申すことはなり

きかはやな人つてならぬ言のはをみとのまくまひまでならずとも  
みとのまくまひとはまことにしたしくなるといふことなり

見るからにかゝみのかげのつらぎ哉かゝらさりせはかゝらましやは  
なけきこし道の露にもまさりけりなれにし里をこふるなみたは

この哥はくりいゑんとあかそめとか王せうくんをよめる哥なりもろこしにみかとの人のむすめをめしつゝこらむしてみやのうちにすゑなめて四五百人とみなめていたつらにあれとのちくにはあまりおほくつもりにければ御らんすることもなくてきふらなるゑひすのやうなるものみやこにまいりたりけるにいかくにかすへぎと人くにおほせられければこのみやのうちにいたつらにおほくはへる人のいとしもなからんを一人たふへきなりそれしまざるこゝろさしあらしと申ければさもおほしめしてみつから御らんしてその人をとさためさせたまふへけれども人のおほさにおほしめしわつらひてゑしをめてこの人くのかたちゑにかきうつしてまいれとおほせられければしたいにかきければこの人くゝゑひすのくにならんことをなきてわれもくゝとこかねをとらせそれならぬものをもとらせければいとしもなきかたちをもよくかきなしてもまいりけるにわうせうくむといふ人のかたちのすくれてめてたかりけるをたのみにてゑしにものをもこゝろさゝてうちまかせてかゝせければもとのかたちにはかゝていとあやしけにかきてもてまいりたりければこれをたふへきにさためられぬそのこになりてめて御覽しけるにまことたまひかりてえもいはさりければ「これは」これをゑひすにたはむみかとおほしめしわつらひてなけかせたまひけれとゑひすその人をなんたまはるへぎときゝてまいりにければあらためきためらるゝこともなくてなくくたひてつかはしければむまにのせてはるかにゐていにけりわうせうくんなきかなしふことかきりなしみかともこひしきにおほしわつらひてかのわうせうくんのゐたりけるところを御覽しければ春はやなきかせになひきうくひすつれくになきあきはこにはにつも

りのきのしのふひまなくてあはれなることかぎりなしこれをきゝて哥によめるなりかゝらざりせばかゝらましやとよめるはわろからましかはたのまさらましとよめるなりふるさとをこふるなみたはみちのつゆにもまさるとよめるはわうせうくんかおもふ覧こゝろのうちををしはかりてよむ世このゑひすのやうなるものと申はこのくにのみかとのわかくにゝはよき女のなきにかたちよからん人たまはらんと申たりけるとも申たるふみありとかや

思ひやれわかれしのへをきてみればあさちか原に秋かせそふく

これは「やうくゑひといふは」むかしもろこしにくゑんそうと申みかとおはしけりもトイ〇よりいろなどこのみたまひけるいみしくあいしたまひける女御きさきなとおはしけるきさき元祿イを源憲皇后といひ女御を武淑妃となむきこえたまひけるいみしくあいおはしけるほとにあいついてふたりなからうせたまひにけりそれをおほしなきてこれらにたる人やあるともとめたまひけるに楊元琰玄イといふ人のむすめありけるかたちよにすぐれてめてたくなむありけるみかとこれをきこしめてむかへとりて御覽しけるにはしめおはしける女御きさきにもまさりてめてたくなむおはしける三千人のてうあひ一人「に」のみになむありけるかくてめてたくおはしけるをもてあそひたまひけるほとによの中のまつりことをもしたまはすはるは花のもとにもてあそひ秋は月をともに御らむしなつはいつみをあいしふゆはゆき「を」ふり見たまひきこれによりて御いとまなくてこの女御の御せうとに楊國忠といふ人になん世のまつりことをはまかせてせさせたまひけるこれによりて世の中「なん」いみしくなきていひける世にあらむ人はをのこゝはまうけ

すして女こをなんまうくへきとそいひけるをきゝてよの人のこゝろにしたかひてあむろくせんといふ人いかてみか  
とをあやふみたてまつりてこの女御をころさんとおもふこゝろありけり漁溟陽イといふところにあそはせたまひけるほとに  
このあんろくせんさいいくさをゝこしほこをこしにさして御こしのまへにふして申けるやうねかはくはそのやう貴妃をた  
まはりて天下のいかりをなくめむたと申ければおしみたまはずしてこの女御をたひてけりイ同あんろくたまはりてみかとの  
御まへにしてころしけりみかとこれを御覽してきもこゝろまとひなみたをよもになかしてみたまふにたえすそありけ  
るかくてみやこにかへり給てくらひをは東宮にゆつりたまひてけりこのことをおほしなけきて春のはなのちるをもし  
らすあきのこのはおつるをも見たまはずこのはゝにはにつもりたれともあへてはらふ事なしかくおほしなけくこと  
をききてまほろしといふ道仕まいりて申さく我みかとのつかひとしてこの女御のおはしところもとめはへらむと申け  
れはみかとよろこひてしからはわかためにこの人のありところをたつねてわかことをつたへよこのみことをうけたま  
はりてかみはおほそらをきはめしもはそこイそらねのくにまでもとめけれともえつゐにたつねえすなりにけりある人のいは  
くひんかしのうみにほうらいといふしまありそのしまのうへに玉妃の大真院といふところありそれになむおはすると  
いひければたつねていたりにけりそのときに山のはに月やうくいりてうみのおもてくらかりゆくはなのとひらみな  
たてゝ人のをともせさりければこのとをたゝきけりあをきゝぬぎたるをとめのひつらあけたるいてきたりていはく  
んちはいかなるところよりきたれる人そまほろしこたへていはくみかとの御つかひなり申へきことあるによりてかく

はるかにたつねきたれるなりこのをとめいはく玉妃まきにねたまへりねかはくははらくまちたまへそのときまほろ  
 してをたむけてたらしてゐたりよあけてこのまほろしをめしよせて玉妃のたまはくみかとはたいらかにおはしますやいなやつ  
 きには天寶十四年よりみこのかたけふにいたるまでいかなることかありつるまほろしそのあひたの事をかたりいひけり  
 かへりなんとしけるとときにのそみてたまのかんさしをなむをりてたまはせけるこれもちてみかとにたてまつれむか  
 しの事これにておほしいてよとなむ申たまひけるまほろし申さくたまのかんさしはよにあるものなれはこれはたてま  
 つらんにわかきみまことゝおほしめさしたゝむかしきみとしのひてかたらひたまひけむことの人にしられぬ事ことイありけ  
 むそれを申たまへさてなむまことゝおほすへきと申ければ楊貴妃はらくおほしめくらしてのたまはく我むかし七月  
 七日たなはたあひみしゆふへにみかとわれにたちそひていひたまひしはたなはたひこほしのちきりあはれなりき我も  
 かくなむあらむとおもふもし天にあらはつはさをならへたるとりとならんちにあらはねかはくは連理のえたをさしま  
 しへたるきとならん天もなかく地もひさしくしてときをはることあらはこのうらみはめんくとしてたゆることなか  
 らむと申しゝとなんかたらひたまひけるかへりてこのよし申ければみかとおほきになしひたまひてつるにかなしひ  
 にたへすしていくほとなくしてうせたまひにけりとそいひつたへたるその楊貴妃かころざれけるところへみかとおほ  
 して御覽しければのへのにあさちかせになみよりてあはれなりけんとみかとの御こゝろのイ○うちをしはかりてよめる歌な  
 り

人しれす思へはうけることのはもつひにあふせのたのもしき哉

これのふのりか女かりつかはしける哥なりけりこの哥の心はもろこしに異招孝といひける人の九九重へのうちよりなかれ  
いてたるかはのなかれにあそひけるにかきのはのみちしたりけるに詩をつくりてかきたりけるかなかれいてたりけ  
るを見つけてみけるよりのち女のでにてありければいかなる人つくりけむとこの人のゆかしさにものおもひになりて  
すへきやうもおほえさりければその詩の和をつくりておなしかきのはにかきてそのかはのみなかみになかしければ九  
へのうちにいりにけりそのゝちこひしきたひにこのかきのはの詩をとりいてゝみてなくよりほかのことなかりけりさ  
てとところをふるにかの宮のうちにこめられていたつらにとしをゝくる女御かすあまたつもりぬれはいとをし我をもた  
のめていたつらにとしをゝくるせうくをはをのくおやにかへしておとこをもせさせむとてかへさせたまひけりそ  
の一人かの招孝をむこにとりつ招孝かのかきのはに詩かきつけたる人のみこひしくていかにもことくせんともおほ  
えさりけれとおやのすることなれば心にもあらずむこにはなりてけりこの女のおもふさまにてあはれに心くるしかり  
ければかのあけくれこひかなしひつる人もやうくおもひわすれてふるほどに女のいひけるは我わかのいかものおもひ「人  
の」すかたにて見えしはいかなることそやねかはくは我にかくすことなかれ招孝こたへていはくわれむかし宮のほか  
にしてあそひきみつのうへにこのはのあるを見れば女のでにてひとつの詩かけりそれを見てのちそののぬしにあひ  
あはんのおもひありて「けふ」いまにわするゝことなししかはあれときみにしたしくなりてのち「ことこのち」ことの



ほかにおもひなくさめることありといへり女これをきゝてそのしはいかゝありし又そのしのわやつくりたりしといひければしかありきといひければ女このことをきくなみたさきにたちてちきりをろかならぬことをしりぬそのしはみつからかせしなりわのし又みつからかもとにありといひてをのくとりいてたるを見ればたかひにわかつてあるに「みゆるに」おほろけのちきりにはあらずとしりぬそもくいかにしてかわかしをはえしこのみいたつらに月日をおくことをなげきてかはのほとりにあそひきいのはさまになかれとまりたるこのはを見ればひとつのしありもしありしわかしをみける人のつくりけるかとおもひてをきたりつるなりとそ申けるこれをきけはいもせなからひはさぎのよのちきりのおろかならぬよりおもひよることなればあしよともさたむへきにもあらぬことか

かきこしにむまをうしとはいはぬねイとも人の心のほとをしる哉

この哥は四条の中納言のこしきふのないしのかりつかはしける哥なりうたの心は孔子イしのでしともをくしてみちをおはしけるにかきよりむまのかしらをさしいてゝありけるをみてうしよなどのたまひければしともあやしとおもひてあるやうあ覽とおもひけるに顔回といひける第一のてし十六丁をゆきて心えたりけりひよみのむまといふものかしらさしいてたるをはうしといふもしになれば人の心を見むとてのたまひけるなりとおもひてとひ申ければしかなりとこたへたまひけるつきくのでしともはしたいに十六丁をゆきてそ心えけるされはそならねとも人の心を見るとよめるなり

みかのよのもちゐはくはしわつらはしきけはよとのには、こつむなり

「これはさねかたの中將の人のむすめをかたらひたりけるにもとより人に見えたりける人なればいかに中將とのほかしくおほしめすらんといひてむすめをはちしめければむすめはらたちであらくいひければは、またはらたちてむすめをつみければそ【ひたらさめりされはなをしらぬことなめり我は人よりもわろくよみ人よりもあしくしれるそともふへきなりそれそすゑにはかなうへきよのすゑの人は我はひとよりはよくしれるとおもへるなめりそれはかなふへからさることなりよのすゑはよくよめるものはみえすた、あしくともこのむへきなりこのむものを歌よみといふなりたとひこのもしからすともかまへしりてこのみちにむつれたしくなりてうとからぬものになるへきなりむけにとはぬ人になりぬればのかれかたきをりにさとりてやはとてすればことあたらしくてかほあやまりてす、ろはしきなりをのつからよきさまにいひたれとも人ほ、ゑみてをこのものになりぬ後冷泉院の御時四條の宮の御ゆめさ】れをき、てかの中將のよめる哥なりよとのといふはつねのところをいふなり」（は、こといふはもちゐにするくさのな、り人のむすめのはしめて人にもゆるはみえてのち三日といふにもちゐをくはするなりそれかさきくも人に見えにけりとおもふにはくはせぬ也さることのありければよめる也

かるもかきふするのとこのいをやすみさこそねざらめか、らすもかな

これはゐのし、のあなをほりていりふしてうへに草をとりおほひてふしぬれば四五日もおきあからてふせるなりかる

もといふはかのうへにおほひたるくさをいふなりされはこひする人はいをねゝはぎこそねぎらめとよめるなり

あらたまのとしのやとせを待侘てたゝこよひこそ新枕すれ

これはいせものかたりの哥なりにいとふはあたらしといふことなりまくらといふはおとこをいふなりおとこのるなかへゆきにけるをよるひるまちけれともせとせになりにけれはうせにけるなめりとてあたらしくおとこをしたりけるよかのるなかにありけるおとこのきてかたとをたたきければおもひわつらひてよめる哥也

住よしの神はあはれと思ふらんむなしきふねをざしてきたれは

この哥は後三条院のすみよしまうてによませ給たる哥なりむなしきふねといふはみかとのくらゐさらせたまふをはむなしきふねと申ことのあるなりその心はふねにゝをつみたるほうみをわたるにおそれのあるなりにおろしつればおそりなくてやすらかにうみをわたるなりそれかやうにみかとのくらゐさらせたまひつればよろうつにおそれもなきふねをさしてまいりたれば神もあはれとおほしめすらんとおほしきに又はんにやのふねと申ことのあるなりその心は般若のふねして苦海をわたれば神佛のよろこひたまへはすみよしの明神もあはれとおをすらんとよませ給ひしなめり

白雲のおりある山とみえつるはたかねにはなやちりまかふらん

これはたゝみねに春うたゝてまつれとせむしありけるにつかうまつれる哥なりみつねこれをぎゝてふさうおほきにあやまてりいかてかせんによりてそうする哥にくもおりるとはよまんみかとをはくものうへと申くらゐさらせたまふ

をはおりぬさせ給と申すくもおりゐると申てすゑにくもまかふとよめりかやうのことあやまるへきものにははへらす  
これはしかるへきことなりとそ申にあはせて世の中かはりにけるとそ申つたへたるよのすゑなれとほりかはの院の御  
ときにてむしやうのをのこともめめて哥よませたまひけるにきたいへん長忠をめしてたいめしけるにゆめのゝちの  
ほとゝきすといへるたいをたてまつりたりけるにをのゝみなつかうまつりてのちこのたいいとあやしゆめのゝちと  
いへることはまかゝしきことなりこのよをはゆめのよといへはゆめのゝちとは後生をいふなりいかてかみかとのめ  
さむたいにはゆめのゝちといふたいをはいらせあけむこれしかるへきことなりなとよの人申あひたりしほとにその  
けにやいくはくのほとなくてかくれおはしましにきその哥よませたまひし日はめしありしかといたはることありてえ  
まいらざりき「それそたまさかにものよきこともし」

おなし御とき中宮の御かたにてはなあはせといふことのありしにそのみやのすけにてゑちせんのかみなりさねかたま  
のみとのといふことをよみたりしをよにいまゝしき事に人の申しかほとなくとりつゝきてうせたまひにしこそあや  
しかりしかほりかはのゐんのはゝきさきの御ときにかうしんのよさふらひともみやつかさあつまりてうたよみけるに  
のりときかりたいをこひにやりたりければ月しはらくかくるといふたいをゝこせたりけるをのゝよみければくも  
かくるとのみよみあひたりければまことにいまゝしきことにてうたともをすてゝけるとそきこえしそれもほとなく  
かくれおはしましにき又いうはうもん「の」院の御時にねあはせといふことありしにすはうのないか〇しといふうたよみ

のわかしたもえのけふりなるらんとよめりしをよき哥などよに申しを「人もゆひ」けふりのそらにたなひかんはよきことにはあらずと申しかはよみ人のためにそいかゝとうけたまはりしにほとなく院かくれおはしましてのちにそ哥よみのないしはひさしくありてかくれ候かやうの事はよしなきことなれともこれらを御覽して御心つかせたまはんれうになり人に見せさせ給ましきなり

心うき年にも有哉はつかあまりこゝのかといふに春のくれぬる

これは四条大納言のいゑにてはるのくるゝを人くあつめてくれぬるはるをおしむ心をよみけるになかたうかよめる哥なり大納言うちきゝけるまゝにおもひあへず春は卅日やはあると申されたりけるをききてなかたうひかうをきゝはてゝやかていてにけりきて又のとしやまひをしてかきりにたりときゝてとふらひにつかはしたりければよろこひてうけたまはりぬたゝしこのやまひはこそその春のつくる日は卅日やはあるとおほせられしに心うきことかなとうけたまはりしにやまひになりてそのゝちいかにもゝくはれ候はてかくなりて候なりと申けるさて又日うせにけり大納言ことのほかになけれけるとそうけたまはりしされはかはかりおもふはかりの人の哥などはおほづかなきことありともなむすましきれうにしるし申なり

ためよしも申儒者のこにのふのりと申ものありきおやのゑちうのかみになりてくたりける時にくら人にてえくたらてかうふりたまはりてのちにそまかりけるみちよりやまひをうけていきつきければかきりなるさまになりけりおやま

ちつけてよろつにあつかひけれとやまさりければいまはのちの世の事をおもへとてまくらかみにそうめてのちのよのことはちこくはひたふるになりぬちうゝといひてまたきたまらぬほとははるかなるくはうやにとりけたものたになきにたゝ一人あるところほそさこのよの人のこひしきなどのたへかたさををしはらせ給へないひければめをほそめに見あけていきのしたにそのちうゝのたひのそらにはあらしにしたかふもみちかせにしたかふおはなこのもとにまつむしなどのこゑはきこえぬにやとためらひつゝいきのしたにいひければそうにくぎのあまりにあらゝかになにのれうにたへぬるそとゝひければさらはそれみてこそはなくさまめとうちやすみていひければそうこのことものをくるとしてにけてまかりにけりさる人心はへもありとしろしめさむれうにやくなけれと申なりおやありてめのはたらかんかきりはとてそひめてまほりければふたつのをさゝけてありければ心もえて見ふたりけるにもかゝむとおほしめすにやと人の心えて申ければうなつきければふてをぬらしてかみをくしてとらせたるければかきたる哥

みやこにもこひしき人のあまたあれはなをこのたひはいかむとぞ思

はてのふもしをえかゝていきたえにければおやこそさなめりとてふもしをはかきそへてかたみにせんとてをきてつねに見てなきければなみたにぬればはてはとれうせにけるとかや

みつうみとおもはさりせはみちのくのまかきの嶋と見てやすきまし

これはきむたゝの弁のこに観政そうつと観遊君といひける人あにをとゝくしてちくふしまといへるところへまいりけ

るにそのとしことのほかにあめふりておほみついでたりければおほつイのつむのこいゑともみなうみにひたりてわつかにかきのイのすゑはかり見えけるなるをわけゆきけるをみて観遊君かよみてそうつにかたりけるなりこの哥のかへしをよむへけれとおほきなるなんありさあればかへすましと申けるにさらになむおほえはへらすといひてふたりるむしけるををのくおやの弁に申て一定せんと申て京へかへりけるまゝにいきてかゝることなむはへりしとかたりければおやの弁きゝてよくくあむしてとみにものいはざりければをのくいふかりおもひてのひあかりつゝとくきかまほしけにてゐたりけるによくくイほしめてとはかりありてなとかさもいはさらむ又なむもいはれたりとそはむしけるなんはまかきのしまとみてはすきかたしとこそいはめまかきのしまにはちを見するなりとそなむしけるこれまたさせることなれとかやうのことくにてこのころのうたをさためむれうにかけるなり

霰ふるかたのゝみのゝかり衣ぬれぬやとかす人しなれば

ぬれくもなをかりゆかんはしたかのうはゝのゆきをうちはらひつゝ

これはなかたうみちなりと申うたよみとものたかゝりをたいにするうたともなりともによきうたにて人のくちにのれりかの人くわれもくとあらそひてひころへけるになをこのことけふカイきらむとともにくして四条の大納言のもとにもうてゝこの哥ふたつたかひにあらそひていふにこときれすいかにもけふはんせさせたまへとをのく申ければかの大納言この哥をしぎりになかめあむしてまことに申たらむをのくはらたゝれしやと申されければさらにともかく

もおほせられんにはらたち申へからすそのれうにまいりたれはすみやかにうけたまはりてまかりいてむと申ければさ  
らはとて申されけるはかたのゝみのゝと○哥いへるイはふるまへるやうたいもしつかひにイまことにおもしろしはるかにまさりて  
きこゆしかはあれともろくのひか事なりたかゝりはあめふらむはかりそえエイせてとまるへきあられふらむはかりによ  
りてやとかりてとまらむはあやしきことなりあられなとはさまてかりころもなどのぬれとをりておしきほとにはあら  
しなをかりゆかんとよまれたるはたかゝりのほいもありまことにおもしろかりけむと申されければみちなりたちてま  
ひかなてゝいてにけり

哥のやつをやまひのなかにこうくりわイいのやまひといふものありうたをすみやかによみいたしてのちよきことはふしを  
おもひよりてかくいはてなとおもひてくひねたかるをいふなりされはなを哥をよまんにはいそくましきなりいまたむ  
かしよりとくよめるよきことなしされはつらゆきなとはうたひとつを十日廿日にそよみるかれたゝしかかくはイはあれとをりに  
したかひときに「したかひて」よるへしとぞ

おほえ山いくのゝ里みちイのとをければまたふみも見すあまのはし立

これはこしきふのないしといへる人の哥なりことをこりはこしきふのないしはいつみしきふかむすめなりそのいつ  
みしきふかやすまさかめにてたんにくたりたりけるほと京にうたあはせのありけるにこしきふのないしうたよみに  
とられてよみけるほとに四条中納言さたよるといへるは四条大納言きむたうのこなりその人たはふれてこしきふのな



いしのありけるにたんこへつかはし、人はまいりたりやいかに心ほとなくおほすらむとねたからせんとて申てたちければないしみすよりなからすきいて、わつかになをしのはたそてをひかへてこのうたをよみかけ、れは中納言こはいかにかゝるやうやはあるとてつゐるでこのうたかへしせんとてしはしおもひけれとえおもひえざりければひきかへりてにけにけりこれをおもへは○とくよめるもめてたしみちのふの中將のやまふきのはなをもちてうへの御つほねといふところをすきけるに女はうたちゐこほれてさるめてたきものもちてたゝにするやうやあるといひければもとよりやまうけたりけん

くちなしにちしほやちしほそめてけり

といひてさしいれたりければわかき人くえとらざりければおくにいせたいふかさふらひけるをあれとれとみやのおほせられければうけたまはりてひとまのほとみさりいてけるにおもひよりて

こはえもいはぬはなのいろかな

とこそつたりけれこれをうへきこしめしてたいふなからましかははちかましかりけることかなとそおほせことありけるこれらをおもへは心とくよめるもかしこきことなりこゝろとくうたをよめる人はなかくひさし、よめはあしくよまるゝなり心をそくよみいたす人はすみやかによまんとするもかなはずたゝもの心にしたかひてよみいたすへき也いにしへのいゑのかせこそうれしけれかゝることのはちりくとおもへは

後冷泉院御時に十月はかりに月のおもしろかりけるに女はうたちあまたくしてあそはせたまひけるにかへてのみちをらせたまひていせたいふかむまこのありけるになけつかはしてこのなかにはをのれせんとおほせられければほとなく申ける哥なりこれをきこしめしてうたからはさるものにてときこそおそろしけれとそおほせられけるこれはせうくくのふしをくれたりともとくよむへしとおほゆをそくよみてよきためしは申へからす

のういむ法師は哥をうかひして申さうしなともてあらひてそひろけゝる「たゝうちするかとおもひけれと」さぬぎのせんしかねふさと申人ののういむをくるまのしりにのせてまかりけるに二条とひむかしのとう院とはいせかいゑにてありけるにねの日のまつありけるをさきをむすひてありけるかおひつきてまことにおほきなるまつにてちかうきてありしかすゑの見えければくるまのしりよりまとひおりければかねふさのえこゝろもえていかなることそとたつねければこのまつのきはかうみやうのいせかむすひまつに候はすやそれかまへをはいかてかくるまにのりなからはすきはらんといひてはるかにあゆみてすゑのかくるゝほとになりてこそはくるまにはのりけれ又うこむのたいふくにゆきと申うたよみたちのみちのくにへくたりけるにうたよみともあつまりてせんしはへりけるにしらかはのせきすきむひはみつ水ひんかきてうちぎぬぎなむとしてすきよとをしへければいかなればさすへきそくにの人のあつまりてみるかととひければいかてかこののういむほうしかあきかせそふくしら河のせきとよみたらむせきをはけなりにてひんふくためてはすぎたまはんそといひければ人くわらひけりとかやさるともこのみちをこのまんとおほさむはさやうにし

てそうたよまれたまはんとそ申けるされはこのみちをこのまん人はよのすゑなりともかしこまるへきなりうたのよきあしきをしらんことはことのほかのたいしなめり四條大納言のこの中納言のしきふとあかそめといつれかまさるそとたつね申されければひとつくちにいふへきうたよみにあらずしきふはひまこそなけれあしのやへふきとよみたるものなりいとやむことなきものなりとありければ中納言はあやしくおもひてしきふかうたをははるかにてらせやまのはの月と申すうたをこそよの人はよきうたとは申すめれと申されければそれそのえしらぬことをいふよくらぎよりくらしきみちにそいりぬへきといふは法花経のもんにはあらずやされはいかにおもひよりけむともおほえずこやとも人をしていひてひまこそなけれといへることはほんふのおもひよるへきことにもあらずいみじきことなりとそ申されける天とくの哥合にもねざめざりせはといふほとゝきすの哥こイにそはほとゝきすのうたのなかにはえもいはぬうたにては候へとも人ならはまてと「は」いはましをといへる歌はこのころの人のうたにとりてももイこしつゝきなともてつゝけにてわろき哥と申へきうたなるをおなしほとこのうたときためられたりこれをおもへはいまやうの人のよしあしといへるはそらをそろしきことなめりさりとてはよむばかりにてはものもいはてやはあるへきとてたゝ人まねに申なめり京極殿にしやうとうもん院のおはしましけるときみなみおもて花さかりなりける時ひかくしのまのほとにけたかくかみさひたるこゑしてこほれてにほふはなさくらかなとなとめカイけるこゑをきこしめしていかなる人のあるそとて御覽しければとに人のあるけしきにも見えさりければをちをほしめてうちとのにいそき申させたまひければそのくせにてつねにな

かめはへるなりとぞ申させたまひけるされはものゝれいなとのめてたきうたとおもひそめてつねになかむらむはま  
によきうたなめりとおもへはわつかにしういせうはかりにいりたりことものは見えす』以下五葉一本二ハナシよの人もさまてはおもひ＊  
わかしとてその御いのりせさせたまはんとてあからさまに東三条とのにいてさせたまひけるにときのきさきのめつら  
しくさとにいてさせたまひたりければかたちちめてんしやう人のこるなくあつまりてあそひてあすは人々まいいりあ  
つまりていけのふねのりてあそはんときして宮つかさをめしてあすも人々まいいりて御ふねにのりてあそはんとす  
御ふねにやかたなとしてふねさしなとまうけ候へとおほせられければ又この人たちみなきかれぬけふなき人々にこ  
のよしつけ申せと藏人におほせくたしてみなまかりいてぬ宮つかさあつまりて御ふねはいかゝすへきもみちをおほく  
とりにやりてふねのやかたにしてふなさはさふらひのわかきよけにてことかなひたるをさしたりければにはかに  
かりはかまなとそめなとしてきしめきけりその日になりて人々みなまいいりつとひぬ御ふねはまうけたりやなとゝひ  
ければみなまうけて候と申てそのときになりてしまかくれよりこきいてたるを見ればなにとなくひたたりなるふねそ  
こきいてたるみればなにとなくおもしろかりけり人々みなわかれて管弦のくとも御前に申いてゝそのことする  
人々まへのまへにをきつやう々さしまはるほとにみなこのふけむたうのうちのうちのそう正そうつのきみとて御修法  
して候けるにかゝることありとでもろくのそうたちわかきをとなとあつまりてにはにみなみたりわらへしもほうし  
にいたるまでゝうはなとさうすきてさしのきつゝむらかれるたりそのなかに良暹と申うたよみありけるを殿上人見し

りてあれは良遅かさふらふかたとひければ良遅めもなくゑみてひらかり候ければかたはらにわかきそのさに候と申ければあれふねにめしのせてれんかなとせさせんはいかゝあるへきといまひとつのふねの人ゝに申あはせければいかゝあるへらのちに人やさらてもありぬへかりけることかなとや申さんとありければさもあることゝてたゝきなかられんかなとはせさせてむとさためてちかくこきよせて良遅さりぬへからんれんかなとしてまいらせよと人ゝ申されければざるものにもしきやうのことやあるとてまうけたりけるにやきゝけるまゝにほともなくかたはらのそうにものをいひければそのそうことゝしくあゆみよりて

もみちはのこかれて見ゆるみふねかな

と申候なりと申かけてかへりぬ人ゝこれをききてふねにきかせてつけゝるかをそかりければふねをこくともなくてやうゝつゝしまをめぐりてひとめぐりかほとにつけんとしけるにえつけさりければむなしくすぎにけりいかにほそしとたかひにふねゝあらそひてふためくりになりけりなをえつけさりければふねをこかてしまかくれにてかへすゝもわろきことなりこれをいまゝてつけぬはみなくれぬいかゝせんするといまはつげんのころはなくてつけてやみなんことをなげくほとになにこともおほえすなりぬことゝしく管絃のものゝく申をろしてふねにのせたりまことにいさゝかゝきならず人もなくてやみにけりかくいひきたするほとにふけんたうのまへにそこそはくおほかりきわか人みなたちにけり人ゝふねよりおりておまへにてあそはんなどおもひけれとこのことにことたかひてみなにけてをの

くうせにけり宮つかさ御まうけしたりけれといたつらになりてやみにけりかりあれは藏人うちにまいりてはへりければうちきこしめしておまへにめしてきていかなることともかありつるとはせ給ければこのことゝにをありつるやうにしたいにかたり申ければみかとおほきにおとろかせたまひてこのこときくに人くのはちにあらすわかにはちこそあなれとなにかゝたるとていらせたまひにけり藏人にかりてたちにけりそのち人くいきあひつなけくよりほかのことなかりけりとのはうちにおはしましけるほとにしてはしきこえざりけるほとにつゐにきこしめしてひと日みくるしきことや候けるなをさやうのことはつねのふなと候はぬけなりわかきものともあふなきはかゝるはちかましきことの候なりと申させたまひけれいよくうちなけかせたまひけりこのことをこのむものはあやしけれともおもなくいひいてつうちわらひてやみぬるものなりその日もつけたる人はありけめともこのまぬ人はつましきにはななとにはえいひいたさてほとへぬれはやかてこもりぬるなりされはなをよしなきことなれとかやうのおりのれうにおもなくこのむへきなり

天保九年戊戌正月二日以一本校合了

岩崎美隆

（壽永二年八月二日於紫金臺寺見合了依知足院入道殿下命奉為賀陽院俊頼朝臣所作今頭家朝臣本号俊秘鈔  
一本コノ興年ナシ）

自教懿御僧相伝之

智範之

明曆二年八月中旬以類本令校合早

方則